

袋井市大畑遺跡

—— 1981年度の発掘調査概報 ——

1 9 8 2

静岡県袋井市教育委員会

序 文

笠原台地の茶園の下に埋もれた大畑遺跡は、私たちに縄文文化の多くの側面を見せてくれる歴史博物館であります。数次にわたる調査により、住居跡、土壌、ビットなどの遺構はもちろん、死者を埋葬した土壌からは多数の人骨が出土しております。また、大畑遺跡が私たちに興味をひかせることの一つは、当時の食生活の様子が詳しくわかることです。正面に貝類や魚類の棲息するラグーンが広がり、背後にはシカ、イノシシをはじめとする獣類が活動する小笠丘陵をひかえたこの地での食生活は、きびしく多岐にわたっていたと思われます。

本年度は、縄文時代中期の一括土器を出土する住居址の調査をはじめ、大畑遺跡航空測量図化、第1号人骨取り上げ作業、更に自然科学的な各方面からの考察等、盛りだくさんの成果を得ることができました。これらの研究は、やがて着工される「袋井市歴史民俗資料館（仮称）」建設時には中心的資料として市民の学習の一助となることでしょう。

遺跡の発掘調査という仕事は、保存されつづけた遺跡を発掘調査という手段によって遺構の状態を知り、破壊することによりはじめて可能となります。貴重な遺物を得る代償をして祖先の生活した跡を次々と失わせているといえます。開発行為による発掘調査に追われている文化財の姿を見るにつけ、文化財行政の転機の実感を感じます。自然の破壊により環境の悪化を招いた例は、山崩れや鉄砲水、大気汚染などの多くが指摘されています。とめどもない埋蔵文化財の破壊も私たちに潤いのない乾いた心を積み上げているのかもしれません。文化財の保護は、自然環境を含めた歴史的環境の保護という観点から見直すことも必要ではないでしょうか。

末尾になってしまいましたが、発掘調査、遺物整理作業、概報のまとめにあたりまして、終始あたたいご指導、ご助言をいただきました静岡大学の市原寿文先生、静岡県教育委員会文化課の諸先生、東京国立科学博物館の山口敏先生、早稲田大学の金子浩昌先生、静岡大学の伊藤通玄先生、京都大学埋蔵文化財研究センターの清水芳裕先生、奈良国立文化財研究所の沢田正昭先生、ならびに関係者各位に対し、深甚なる謝意を表する次第であります。

袋井市教育委員会

教育長 鈴木 勲 一

例 言

1. 本書は、昭和56年8月20日～昭和57年3月31日に実施した静岡県袋井市岡崎4766他に所在する大畑遺跡の発掘調査概報である。
2. 発掘調査は、大畑遺跡内での茶園改植に伴い国および静岡県の補助金をえて、袋井市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は、市原寿文氏（調査顧問・静岡大学教授）の指導により、山下晃（静岡県教育委員会文化課指導主事）、永井義博（袋井市教育委員会）が担当した。
4. 本調査及び資料整理参加者は次のとおりである。

山本宏司（駒沢大学卒業生）

大庭康時（静岡大学学生）

浅井征江、寺田せつ子、寺田ひで子、鈴木咲子、仲根世始子、名倉保子、鈴木みづ江、
早川はるみ、寺田松枝（以上、豊沢地区）
神谷雅子、鈴木志づ子、竹内キヌエ、鈴木八千代、竹内勝代、斎藤富士子、竹内たけ子
神谷安子、浅井やゑ、戸塚はな代、神谷れつ、芝田とく、神谷直昭（以上、笠原地区）
ここに記して深く感謝の意を表したい。

5. 本調査にあたって次の方々の協力を得た。

吉岡伸夫、西井幸雄、松井一明、太田馬仔雄、兼子弘美（以上、袋井市教育委員会）

寺田義昭、五島康司、早川保子、荒生健志、高野由美子、鈴木利枝、大庭京子

6. 本書の執筆は調査員が協力しておこない、市原寿文氏がこれを監修した。
7. 自然科学的な考察については次の諸先生にお願いした。

第5章 第4節 石材質の鑑定について 伊藤通玄（静岡大学）

第5章 第5節 出土人骨について 山口 敏（東京国立科学博物館）

第5章 第6節 出土の脊椎動物について 金子浩昌（早稲田大学）

第5章 第6節 土器の胎土分析 清水芳裕（京都大学埋蔵文化財研究センター）

8. 整理作業は、調査員が分担しておこない、遺物の実測・トレースは、主に松井・西井・高野が担当した。遺構の図版、写真撮影は永井が行った。
9. 調査資料はすべて、袋井市教育委員会が保管している。

目 次

第1章 調査に至る経過	1
第2章 調査の経過	1
第3章 調査の方法	2
第4章 地理的環境・歴史的環境	3
第5章 調査の概要	7
第1節 層位	7
第2節 遺構	7
第3節 遺物	17
第4節 石材質の鑑定について	伊藤通玄 30
第5節 出土人骨について	山口 敏 39
第6節 出土の脊椎動物について	金子浩昌 41
第7節 土器の胎土分析	清水芳裕 44
第6章 総 括	市原寿文 46
付載 大畑遺跡出土人骨の取上げについて	50

挿 図 目 次

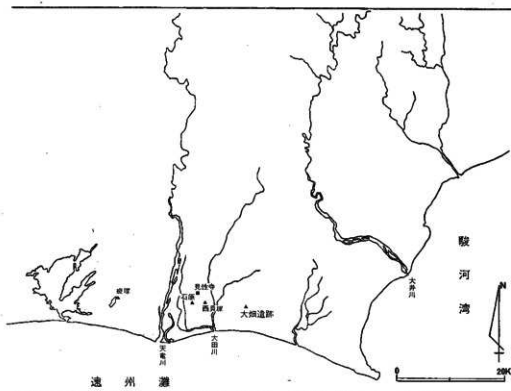
挿図第1 東海の縄文貝塚分布図 挿図第2 大畑遺跡周辺の縄文遺跡分布図 挿図第3 大畑遺跡航空量測図……………(4) 挿図第4 昭和56年度発掘区域 基本ライン土層図……………(5) 挿図第5 F4-NW大遺体出土状況 実測図……………(8) 挿図第6 E4, E5, E6, F4, F5, F6, Ⅲ a 層内遺物散布図……………(9) 挿図第7 E5-S E内土壌平面 実測図……………(11) 挿図第8 F4-S E内集石土壌 実測図……………(11) 挿図第9 暗黄褐色粘土層面遺構 平面実測図……………(12) 挿図第10 E 5 住居跡実測図……………(13) 挿図第11 E 4 住居跡実測図……………(14) 挿図第12 F 6 土壌実測図……………(16) 挿図第13 E 5 住居跡内出土土器 実測図(1)……………(19)	挿図第14 E 5 住居跡内出土土器 実測図(2)……………(20) 挿図第15 E 5 住居跡内出土土器 実測図(3)……………(21) 挿図第16 E 5 住居跡内出土土器 実測図(4)……………(22) 挿図第17 E 5 住居跡内出土土器 拓影(5)……………(23) 挿図第18 E 5 住居跡内出土土器 拓影(6)……………(24) 挿図第19 E 5 住居跡内出土土器 拓影(7)……………(25) 挿図第20 土製品, その他の遺物 実測図……………(28) 挿図第21 出土土器実測図……………(29) 挿図第22 胎土の岩石鉱物……………(44) 挿図第23 元素量にもとづく分類樹……………(45) 挿図第24 取上げ保存人骨実測図……………(50)
--	---



挿図第1 東海の縄文貝塚分布図

図 版 目 次

- | | |
|--|--------------------------|
| 図版 1 大畑遺跡航空写真
(昭和54年4月22日撮影) | 図版 7 E 4 住居跡完掘状況 |
| 図版 2 大畑遺跡全景
調査区より小笠丘陵を望む
市民による遺跡見学 | F 6 土壕完掘状況 |
| 図版 3 E 6 区際散布状況
F 5 区際散布状況
F 5 - NW 大埋葬状態 | F 6 - NW 内頭蓋出土状況 |
| 図版 4 F 5 - NW 貝ブロック山土状況
E 5 内土壕
F 4 内集石土壕 | 図版 8 調査区南完掘状況 |
| 図版 5 E 5 住居跡および遺物山土状態
E 5 住居跡出土遺物近景
平出 3 A 系土器出土状態 | G 4 - SE 完掘状況 |
| 図版 6 E 5・E 6 完掘状況
F 5 完掘状況 | E 5 住居跡調査風景 |
| | 図版 9 人骨取上げ状況 |
| | 図版 10 E 5 住居跡出土遺物(1) |
| | 図版 11 E 5 住居跡出土遺物(2) |
| | E 5 住居跡出土遺物(3) |
| | E 5 住居跡出土遺物(4) |
| | 図版 12 土製品・その他の遺物
出土石器 |



註：この図は本文16ページの文献を参考に新発見の貝塚を加筆し作成した。



挿図第2 大畑遺跡周辺の縄文遺跡分布図 (国土地理院発行 N1-53-2-4 豊橋4号)

第1章 調査に至る経過

大畑遺跡は、江戸時代の文獻にすでに登場するほど古くから著名な遺跡である。資料はその後たびたび郷土史家により発表されてきたが、昭和26年3月に明治大学考古学研究室の手によって正式な発掘調査が実施された。さらに、昭和52年・53年には静岡大学の市原寿文教授により詳細な調査が実施され多大な成果をあげてきた。このような調査の結果により、さらに一歩進めて大畑遺跡の全体像をつかむために昭和55年に遺跡全域にわたる範囲確認調査が実施された。この際、遺跡内の土地所有者より、来年には茶園改植を行いたいという申し出があった。改植予定の3筆の茶園は大畑遺跡の集落の中心に位置し、55年の調査区においても住居跡・屈葬人骨を出した重要な部分であった。そこで、袋井市教育委員会は静岡県教育委員会文化課をはじめとする関係各機関と協議した結果、国、県から補助金を受けて茶園改植に伴う緊急発掘調査をおこない記録保存処置をとることとした。現地調査は、静岡県教育委員会及び静岡大学の市原寿文教授の指導のもと袋井市教育委員会が実施した。(山下 晃・永井義博)

第2章 調査の経過

○8月18日より20日まで、器材の搬入・調査基本杭と発掘グリットを設定した。発掘グリットは、昭和52年度静岡大学の調査をもとに55年の大畑遺跡範囲確認調査の際に打った基準杭より設定した。グリット名等は、静岡大学の使用した名称を引き続き使用している。各グリットの名称は南北方向の北から南に向ってつけたA～Tと東西方向の1～20を組み合わせ表記している。グリットは一辺10mの正方形となり、やや面積が広いのでその中を4分割して遺物を取りあげた。

○8月21日、慰霊祭の後、発掘調査を開始する。各調査区の表土はぎと、昨年度発掘し、本年度とり上げるために埋土保存した屈葬人骨の様子を見るため排土作業をはじめる。

○8月28日、調査も順調に進みⅠ・Ⅱ層をとってⅢ層が顔を出すグリットが多くなってきた。Ⅲ層の上面では、拳大の隙(なかには焼石もある)の広がる面が確認された。これと同じレベルでは小さな貝のブロックや獣骨、人骨等の自然遺物が多量に検出されている。

○9月4日、E5-S-Eをはじめとして獣骨や貝を含む小土塊が3基検出される。Ⅲ層の上面より掘込まれている直径20cmのピットが環状に並ぶグリットもある。

○9月14日、E5-S-E、F6-S-Wではほぼ完形の土器出土。プランの確認を急いでる。

○9月19日、F4-NE人骨北側の住居跡のプラン確認をおこなう。昨年調査した実測図を検討しながら掘り始める。この住居跡の南側が取上げ予定の人骨と重なっているため、この地区の調査に全力を注ぐ。他の地区はⅢa層の掘下げを継続しておく。

○9月25日、F5-NEで住居跡らしい落込みを確認する。精査してみるが結果は不明である。F4-NEでは住居跡完掘。平面実測にはいる。

○9月30日、E5-S-Wでは西側コーナーで不明落ち込みが確認されている。他のグリットで

は重土層の掘り下げが続けられている。

○10月5日、F4—SEにおいて集石遺構を検出。下部には土壌がある。礫は大きな砂岩系の石が赤く焼けて割れており土器片も混入している。

○10月19日、E5—SE、E6—SW内の住居跡を掘り続ける。中期の土器片が多量に出土している。復元すれば4個体ぐらい形になりそうである。

○10月26日、住居の土器取上げ作業の準備。レベルとエレベーションを記入しながら作図。

○11月4日・5日、人骨取上げ作業の用意。雨が時々落ちる。笠原公民館で大型テントを借りて作業場のスペースをカバーする。風も出てきたためロープで補強する。

○11月7日、早朝、人骨取上げ業者（近畿ウレタン）が来庁する。業者を同行して現場の状況を説明。さっそく作業にとりかかる。小雨の降り続くなか、昨日準備したテントが役に立つ。夕方、作業行程の半分まで終了。シートをかけて雨がつかないようにしておく。

○11月8日、作業再会。切り取り作業完了後クレーンにてトラックへ積み込み。予想以上に重量があり業者のクレーンでは掘らず、急速2tクレーン車を準備して積み込む。夕方、教育委員会分室の仮置場に搬入して作業終了。

○11月10日、南側の排土を始める。出土遺物は少ない。ややレベルが下るので希薄になるのかもしれない。

○11月18日、南側の各グリットではピットと小土壌が検出されている。調査区南端のセクションでは、包含層が認められない。北側の一部グリットでは埋め戻しをはじめる。

○11月24日、遺跡南北方向のセクション作成。写真撮影。平面実測。

○11月26日、発掘現場かたづけ。

○11月27日～30日、実測図作成。残務整理。埋め戻しは後日重機によることとした。

（山下 晃・永井義博）

第3章 調査の方法

発掘調査は、昭和55年度に設定されたグリットポイント、ベンチマークを踏習して行なわれた。今回調査区では、北から南へE・F・G・H、西から東へ4・5・6の名称の部分を使用する。これにより、一辺10mの正方形のグリットが組まれるがこれでは1グリットの範囲が広いため中を4分割し、北西の小グリットよりNW・NE・SW・SEとつけた。これによって、例えば今回取上げ作業をした人骨は、F4—NEということになる。出土遺物・実測図面・撮影済のフィルム整理もすべてこの名称を使用した。

発掘は小グリットごと掘り下げ、セクションベルトは巾50cm残した。このうち、遺構にかかったベルトはセクション実測後、必要に応じて取りはずしていった。ピット、土壌等も必要に応じて半截して実測した。平面原図は1/20を基準として、特殊な遺物出土状態、土器、礫の集中地点は概細図として1/10で作図した。セクション図は、その遺構の平面図のスケールにあわせて作図した。写真撮影は、中型カメラ（6×7）を中心に、小型カメラ（35mm）で補いながら撮影した。

（山下 晃・永井義博）

第4章 地理的環境・歴史的環境

信州諏訪を源として南アルプスの水を集めて南下する天竜川は、多量の土砂とともに太平洋に流れ込んでいる。この土砂は、遠州灘の速い流れにおされて小笠山の南までその影響を与えている。小笠山の南西、大畑遺跡の位置する丘陵の正面はこうして運ばれた土砂が砂丘を形成しこの附近の小河川の流を止めてラグーンを形成するに至った。磐田原台地の南、小笠丘陵の西に位置する広いラグーンは、遠江縄文貝塚群の成立要因となっている。大畑遺跡はこれら貝塚群の中では一番東端に位置して小笠山の西南麓にある。磐田原台地の南端に位置する磐田市石原貝塚、見性寺貝塚、西貝塚などとは、やや立地条件が異なっている。

大畑遺跡の位置する小笠山の地質は中期更新統の礫・砂・泥(粘土)層からなり、主体をなす部分は河成礫層を主として間に何層もの淡水ないし内湾成泥層を挟む小笠層群と呼ばれている。岩種はよく円磨された10cm大の砂岩が圧倒的に多く太田川、天竜川の岩石とは異なり、はるか東方の大井川にその形成要因を求めなければならない⁽¹⁾。

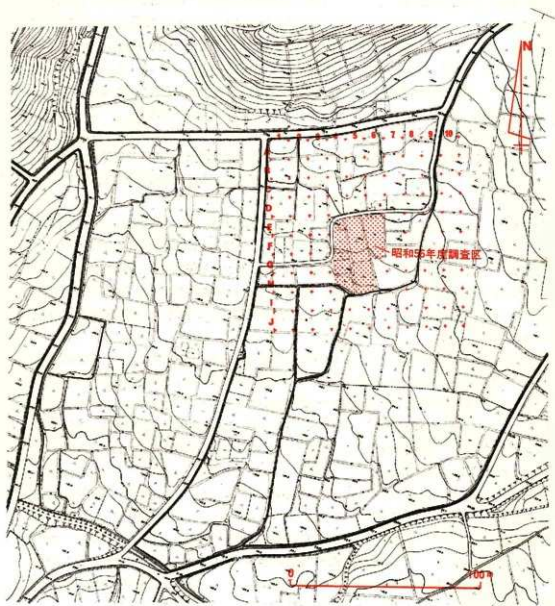
遺跡の立地条件として、大畑遺跡はかなり恵まれていた。いままでの研究を総合してみると、(1)遺跡は平坦な段丘面に位置する。(2)遺跡の背後にある支尾根は冬季の季節風を和げ、一方南はささぎるものではなく光に恵まれている。(3)台地上のため高燥である。(4)小笠丘陵内部へ入るのも、入江に向うのも遺跡の西に沿って位置する井戸ヶ谷の侵食谷に沿って歩けば近距離である。(5)附近に湧水地がたくさんある。など人間が生活する条件の整った環境であると加藤芳朗氏は述べている。

周辺の縄文時代遺跡は少なく、袋井市内では豊沢の長者平遺跡が著名である。昭和53年から数次にわたって発掘調査され縄文中期の多量の遺物と竪穴住居跡・土壌群等が検出されている。また、本年調査した長者平古墳群の第21号墳の周辺からも縄文中期の住居跡2戸以上に、竪穴状の土壌等が報告されている。このうちの1戸、K-16住居跡は直径約11mの県内でも最大級の規模で、三時期の建て替えも確認されている。これらの結果から、長者平の丘陵上は一面縄文中期の遺跡群が存在することを想定することも可能性となってきた。長者平遺跡より丘陵沿いに東へ4km入った茶畑に山木遺跡がある。ここでは、石鏃・石匙・石鏃等の表層遺物をえているがその性格についてはまだ明らかになっていない。この他の袋井市内の縄文時代の遺跡としては、国本の陣屋北遺跡(前期)、久野山遺跡(中期)、三川の山田原遺跡、大谷原遺跡、豆塚Ⅱ遺跡などがある。大畑遺跡の性格を理解するために、関連する遺跡としてはやはり上記にあげた鈴田市内の貝塚群、さらには佐鳴湖のほとりにある浜松市蛸塚遺跡との比較が重視され、さらには愛知県の三河湾沿岸の縄文貝塚群との比較が必要となるであろう。

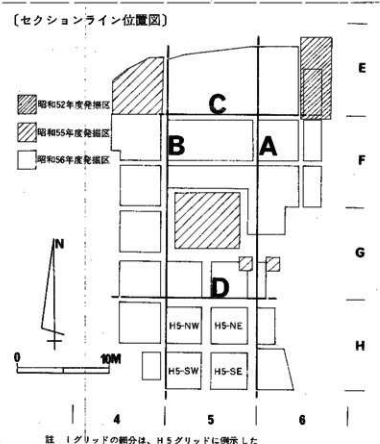
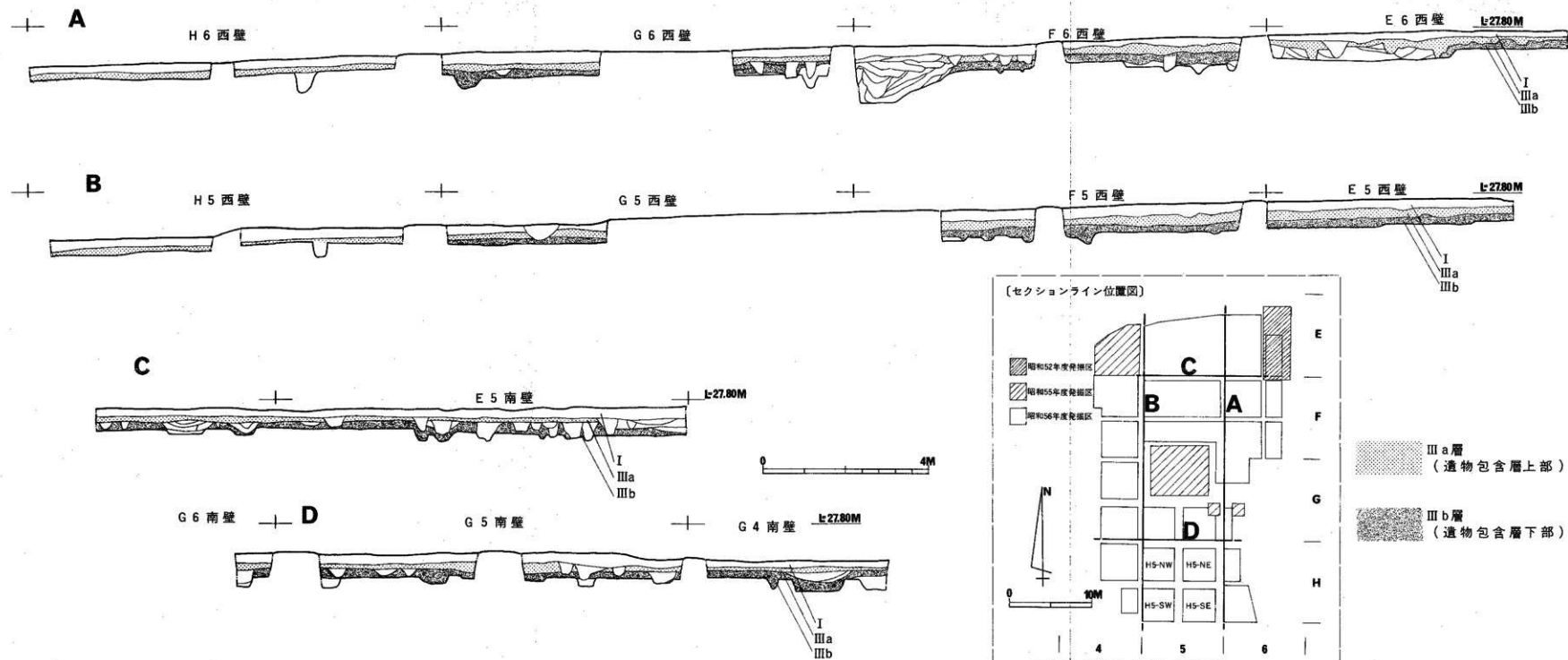
(山下 晃・永井義博)

〔参考・引用文献〕

- (1) 市原寿文編 1978 「袋井市大畑遺跡」—1977年度の調査— 袋井市教育委員会
- (2) 袋井市教育委員会 1981 「大畑遺跡」—1951・1977・1978・1980年度の発掘調査—
- (3) 袋井市教育委員会 1982 「長者平古墳群」



地図第3 大畑遺跡航空測量図（株式会社写真測作製 昭和52年2月）



挿図第 4 昭和56年発掘区域基本ライン土層図

第5章 調査の概要

第1節 層位

今回の調査は南北37m、東西24m、800m²の地区について調査した。このうち、グリットに沿って基本セクションラインとして南北にA・Bライン、東西にC・Dラインの4本を設定した。層位については過去の調査の名称を踏襲したが、調査地点によって若干の修正を加えている。基本層位については次のとおりである。

〔第Ⅰ層〕表土層である耕作土層はすべてⅠ層とした。色調は暗褐色で耕作による攪乱のためしまりがなく土層中に樹枝などが多く含まれている。茶園内と畑地では若干異なるが、本文内では同一耕作土層として扱っている。

〔第Ⅱ層〕過去の調査では、第Ⅰ層＝表土層上半部、第Ⅱ層＝表土層下半部として扱っているが、今回の調査ではⅡ層を一つの層に一括して扱った。

〔第Ⅲ層〕遺物包含層で色調は暗褐色を呈している。今回Ⅲ層は、Ⅲa層（遺物包含層上部）Ⅲb層（遺物包含層下部）の2層に分層して調査した。Ⅲa層は礫・貝・獣骨等の自然遺物の出土がかなりみられた。

〔第Ⅳ層〕暗黄褐色の礫混りの粘土層である。遺跡基盤に相当する拱積層の表面に堆積した漸移層で無遺物層である。

以上のⅠ層からⅢ層まで、色調は類似しており判別はかなり難しい。さらに、これに落ち込みや遺構が複雑に重複するのが大畑遺跡の状況である。

大畑遺跡全体の土層堆積を見ると、ほぼプライマリーな状態で、Ⅰ～Ⅳの基本層が連続している。C・Dラインのセクションでは特に安定した堆積状態を示しており、遺跡の中心部に相当することを印象づける。A・Bラインは北から南とレベルが下降し、南端はやや谷状の地形となっている。遺物包含層であるⅢ層も地形にあわせて南へ移るほど希薄になり、Ⅲb層はH5、H6グリット周辺でとぎれて終わるのが今回の土層観察における重要な成果であった。昭和53年の調査において大畑遺跡は微高地上に弧状に広がる集落跡であることが確認されてきたが、今回の調査ではその南限の一部を確認することができた。（山下 晃・永井義博）

第2節 遺構

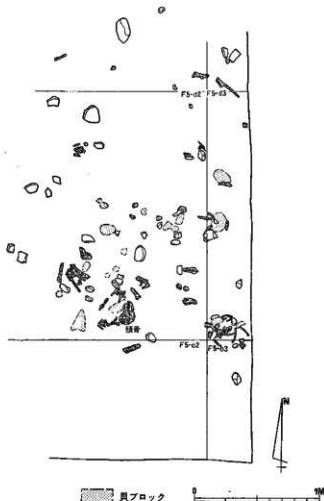
（a）第Ⅲa層（遺物包含層上部）に挟在する遺構

表土層除去後、Ⅲa層面で確認された遺構は第6図のとおりである。遺跡の中を逆U字形に通過している近代の溝跡が遺構面を攪乱してはいるが、他の部分の残存状態は良好である。Ⅲa層全面を見るとほぼ全面にわたって礫群が散布するのが特徴的である。数ヶ所にわたって礫群が集中しているのがみられた。また、礫群とほぼ同じレベルで貝ブロック、獣骨、鹿角等の自然遺物の散布する面がある。これらの礫及び自然遺物の集中ヶ所は重複する傾向を見せ、礫集中ヶ所にはわずかであるが焼石の存在も確認されている。これらのうち、獣骨等の自然遺物の散布状況から、第5章第6節で金子浩昌氏が獲物の解体処理の場として指摘されているの

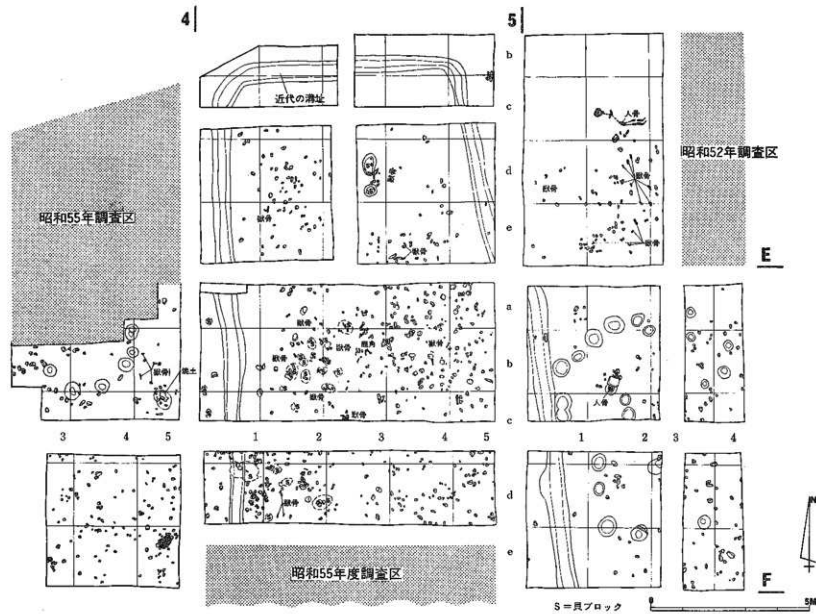
が興味深い。礫についてもこの作業と関係があるのかもしれない。Ⅲa 層の遺構としては埋葬関係以外では若干のピットが検出されている。これらのピットのうち、F 4—NEで1ヶ所、F 6で2ヶ所ピットが円形に回り、住居跡の柱穴の可能性を残している。F 4—NEでは焼土のかたまりが検出されている。炉跡であろう。しかし、これにともなう柱穴や壁溝は不明である。土壌は、E 5—SEで3つ検出されている。3つとも浅い皿状の落ち込みで、内部には貝ブロック、獣骨、礫を包蔵している。その他の遺構としてはF 6—NW内の頭蓋骨を出土した小ピットがある。この頭蓋骨の上部には32cm×30cmの扁平で正方形の石を置いている。四肢や軀幹部分の骨は発見されていなかった。しかし、この付近には貝や獣骨等も少なく骨が消失しやすかったと思われる。頭蓋骨も風化が激しく保存状態は不良である。

Ⅲa 層内出土の自然遺物については、別項にて金子浩昌氏により詳しく解説されているのでそれを参照されたい。

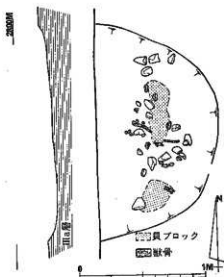
F 4—SE土壌は今回調査の西端から検出された集石土壌である。土壌は、長径1.3m、短径1m、確認面からの深さ50cmを計る。覆土内には、長径25cm×短径15cm大の砂岩系の礫が



插图第5 F4—NW 大遺体出土状況実測図



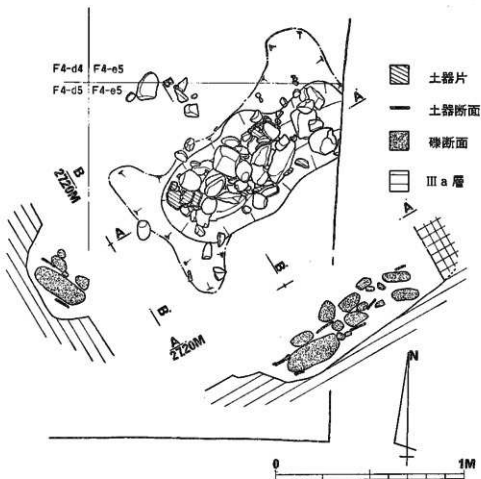
毎図第6 E4,F5,E6,F4,F5,F6,IIIa 層内遺物散布図



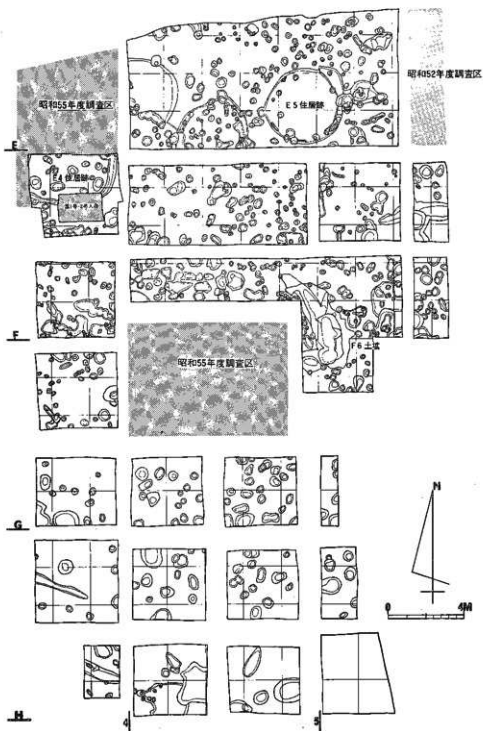
挿図第7 E5-SE 内土坑平面実測図

いっばいに詰っている。これに混ってほぼ一個体分の土器が散在していた。隙の中には長径 60cm にも及ぶ大型の罌もみられ、その他の罌も熱をうけたらしく赤く焼けているものが多かった。割れ方から判断すると高熱によって割れたものらしい。

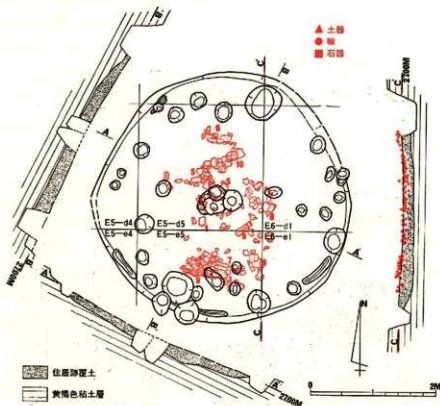
F4土坑の性格についてははっきりしないが、市原寿文氏は人骨の埋葬土坑の可能性を指摘している。残念ながら土坑内から人骨片は検出されないため現在断定はしかねる。



挿図第8 F4-SE 内集石土坑実測図



挿図第9 暗黄褐色粘土層面遺構平面実測図



挿図第10 E5 住居跡実測図

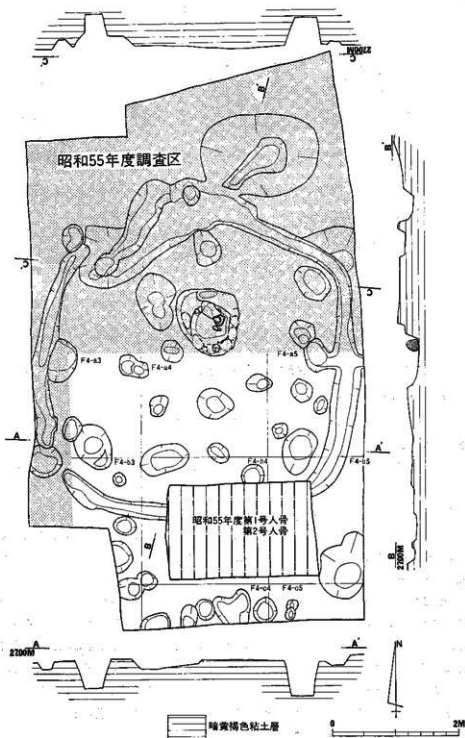
(b) 第Ⅲb層（遺物包含層下部）に挟むする遺構

ここでは、Ⅲb層、Ⅳ層上面で確認された遺構についての概要を述べる。遺構は、住居跡・大型の土壌、小土壌、ピット群等多彩である。

E5 住居跡 は調査区の北側より検出されている。この住居跡は大畑遺跡全体から見ると、北東から南西に三ヶ月状に広がる集落跡の範囲の一角に位置している。調査経過としては、E5、E6内のⅢ層において礫群、貝、獣骨の調査後さらに下層の様子を知るため小トレンチを入れたところ、小トレンチ内より多量の中期の土器片を出土した。そこで、トレンチ周辺を精査しプランの確認をおこなった後掘り下げた。土器は約8個体分出土したが、そのほとんどが中期初頭の土器で石器も若干伴出している。

住居跡のプランはほぼ円形で大小32のピットが住居跡内から検出された。焼土・炭化物等の炉跡に関連するものは検出しなかったが、住居跡中央付近で2個焼石があり炉跡に関係するかもしれない。住居跡の規模は確認面で東西4.2m、南北4m、確認面からの深さは遺物出土面で20cm、最終床面までは30cmである。遺物出土面、最終遺構面とも若干干す鉢状にくぼんでいる。壁溝は検出されていない。柱穴に比定しうるピットは直径60cm～20cm、深さと40cm～10cmさまざまであるが、住居跡の壁ぞいに円形にめぐっている。最終確認面ではさらに小さなピットが検出され、住居跡中央にもピットが検出された。

住居跡覆土は典型的なレンズ状堆積である。床面は小笠山砂礫層まで達しており、住居跡中



排図第11 E4住居跡実測図

央に向かって下っていく凹凸のある面である。この床の上に厚さ 20cm の暗褐色土（住居跡内第 3 層）がある。この層内では良好なスクレイパーが出土した。第 3 層上面が中期の土器片を多量に出土する面ですり鉢状にくぼんでいる。この面の上に第 1 層・第 2 層があり、とくに第 1 層には貝や獣骨をかなり含んでいる。E 5 住居跡の埋没状況を想定してみると次のように考えられる。

- (1) 堅穴が掘られ住居跡が建てられる。人々が生活しながら少しずつ埋まり、またなにかの目的を持ってピットが掘られていく。
- (2) やがて、住居跡が廃棄され、自然の力で少しずつ土砂が流入しすり鉢状の落ち込みとなる。
- (3) 住居跡が埋まりかけた窪地に大型の土器が大量に投棄される。完形品、上部のみの破片等さまざまであるが大型の土器がやや多い。
- (4) 土器の上に土砂が流入し、破片を覆いかくしている時、貝や獣骨が捨てられまた土砂が流入しやがて平坦地になった。

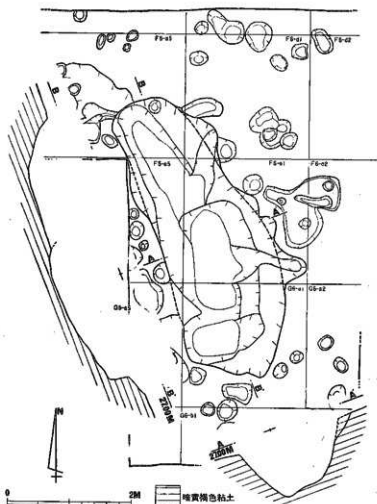
これらの埋没状況は、住居跡内の土層堆積状態から組み立てたのであるが、これは「吹上バターン」と呼ばれた状況と類似している。大畑遺跡の中でこのような様相をみせるのは、この E-5 住居跡のみで、遺跡全体としては特殊な存在といえる。

E4 住居跡は、遺跡の中心部に位置する堅穴住居跡である。この住居跡は、1980 年度の大畑遺跡範囲確認調査の際に北側半分が調査されている。

住居跡は、やや内ばった円形で東西 5.1m、南北 5m の規模である。住居跡の周囲は幅 25cm 深さ 20cm の壁溝がめぐっているが住居跡の立ち上りはつかめていない。住居跡北側は不定形の土壌で攪乱され、南の一部は埋葬人骨の取り上げ作業のため一部未調査である。この住居跡の床面には大小 22ヶ所のピットが検出されているが、四隅に位置する 4ヶ所のピットはやや大きく深い。この 4ヶ所が柱穴であろう。炉跡・北側の土壌との切合い関係は 1980 年の報告書に詳しいので今回は省略する。

F6 土壌は、三ヶ月状の集落跡範囲の東南端に位置する。非常に大型の土壌で長径 4.8m 短径 5.7m を計る。平面形より複数の土壌が重複していることがわかる。深さは確認面より最深部で 1m である。底部は、すでに小笠原層が露出でされピット等は検出されなかった。周辺の遺跡での類別としては、袋井市豊沢の長者平古墳群発掘調査で検出した縄文中期遺構群の中に L-16 土壌がある。これは長者平の丘陵上に 2 軒の中期の住居跡にはさまれるように位置していた。土壌の性格としては、千葉・上の台遺跡、神奈川・霧ヶ丘遺跡等の土壌と類似していると考えている。

その他の遺構としては、E 5 内に 2 つの堅穴状の落ち込みが検出されている。これは、若干のピットをともなっているがそれも柱穴と呼べる規模のものではなく、プランも不明確である。ピット、土壌等は調査区内全体に多数散布しているが、北側の微高地には特に多く、南に向かって下っていくにしたがって遺構は減少している。南端の 3 グリット内では不定形の落ち込みが検出されているが、これらは縄文時代に時期を比定することは難しい。これらの遺構分



挿図第12 P6土坑実測図

布状況と、さきに述べた層位の説明の包含層の南限を対比することによって大畑遺跡の東南限界を推定することが可能である。

(山下 晃・永井義博)

〔参考・引用文献〕

- | | | | | |
|-----------|------|----------------------------------|---------------|---------|
| 岡本 勇 | 1955 | 「静岡県小笠郡大畑遺跡」 | 日本考古学年報4 | 日本考古学協会 |
| 浜松市教育委員会 | 1962 | 「蛸塚遺跡・総括編」 | | |
| 小林達雄 | 1968 | 「多摩ニュータウンNo. 46遺跡における吹上パターンについて」 | 考古学協会発表要旨 34 | |
| 霧ヶ丘遺跡調査団 | 1973 | 「霧ヶ丘」 | 武蔵野美術大学考古学研究会 | |
| 磐田市教育委員会 | 1974 | 「遠江見性寺貝塚の研究」 | | |
| 向坂綱二 | 1976 | 「縄文時代のテリトリー」 | 季刊どるめん 8 | |
| 南知多町教育委員会 | 1980 | 「先訪貝塚」 | | |
| 倉田芳郎編 | 1981 | 「千歳・上ノ台遺跡」 | 駒沢大学考古学研究室 | |
| 名古屋市博物館 | 1982 | 「東海の縄文時代」 | | |
| 加藤晋平他 | 1982 | 「縄文文化の研究」 | 1 | 雄山閣出版 |

第3節 遺物

今回の調査において出土した遺物は、整理箱50箱以上にものぼる膨大なものであるうえに整理の時間の制約や紙面の割りあてなどから、すべての資料を報告することはできなかった。今回の報告では、とくに、遺構内の一括出土をみたE5住居跡出土の遺物を中心として報告することとした。なお他の大部分の包含層中の遺物については、さらに整理作業を進め、後日に報告したい。

E5 住居跡出土土器 (挿図第13～挿図第19)

各土器は、出土状態からおおむね同一時期に扱いうものと思われ、周辺地域の土器分布を手がかりにⅠ～Ⅲに分類した。

Ⅰ系統 長野県～関東地方に分布する土器。本住居跡中3分の1が本系統の土器で、客体的な性格が強い。

Ⅱ系統 東海地方に独自の分布を示す土器。本住居跡中3分の2が本系統の土器で、主体的な要素に位置づけられ。

Ⅲ系統 関西地方に分布する土器。わずか1片の出土にとどまった。

以上のようにであるが、各系統の土器も若干の細分が可能であるため、型式内容を明確にしつつ記述を進めていく。

Ⅰ系統

a類 (挿図第13の1 挿図第17の11～26, 28)

楕円区画を配置し結節状沈線文を多用する厚手の土器を本類とした。

1は胴部が筒状、口縁が球状に膨らむ深鉢形土器で、1/5 個体程度のもを図上復元した。胴部文様は、隆帯で区画しその内側を隆帯にそって2条、さらにその中に2条の波状に結節状沈線を施した楕円区画を交互に配置している。口縁部はキザミ目を入れた隆帯を2条縦位に配置し、その間を2条の結節状沈線を「字」状に施し、さらにその外側に1条の結節状沈線を施している。

ほかに11～26を拓図に示した。11は楕円区画を口縁部まで配置した筒状の深鉢型土器である。区画内は、隆帯にそって2条、その内側を数条の縦位の結節状沈線で埋めており、16なども同文様であろう。19は楕円区画の隆帯の一部にキザミ目を施したもの、13は環状に結節状沈線を施した。本類のいずれかの口縁を飾る小突起であろう。28はややまるみをおびた底部で、胎土、色調より本類の底部であろう。

b類 (挿図第15の9)

薄手で半截竹管文が施された、いわゆる平出3A系とよばれる土器に類似し、9の完形に近いもの1個体がえられた。

9はやや張った胴部、口縁がゆるやかに開く深鉢形土器である。口縁はゆるやかな波状口縁で、口唇部にキザミ目と凹状をなす円形の突起部が付付けられている。口唇直下は粘土帯で肥厚させ、その上に三条の結節状沈線を施している。口縁部は鋸歯状モチーフの半截竹管文、口縁と胴部の境に隆帯を貼付し、その隆帯は胴部にY字状に懸垂する。Y字状懸垂は6ヶ所にみられ、その間は、半截竹管により条線（擬似縄文?）が施された後、逆U字のくずれたような逆J字と一条の縦位の半截竹管で埋められる。

c類（挿図第16の10）

阿玉台系の土器を本類とした。口縁部が1/2ほどえられた10が本類にあたる。

10はやや膨みをもった口縁で、胴部は筒状を呈すると思われる。口縁にはキザミ目を入れた2本の縦位に配された隆帯上の口唇部に、キザミ目を施した扇状把手が付されている。その隆帯間は断面三角形の横J字状の隆帯を2本対称に配置している。胴部はヒダ状指頭庄腹文、断面三角形の隆帯文を施している。

d類（挿図第17の27, 29, 挿図第19の54, 71）

a類と胎土、色調とも似るが、a類とは異なる文様要素をもつものを一括し本類とした。

29は縦位の隆帯を配し、その間をL Rの結節縄文が施文されている土器の底部、54は半截竹管文を縦位に施したもの、半截竹管文と地文に縄文を施した71などがある。27は円形竹管文が施文されたものであるが、胎土、色調ともa類とは異なりあるいは播磨的に後出の土器かもしれないが、一応図示した。

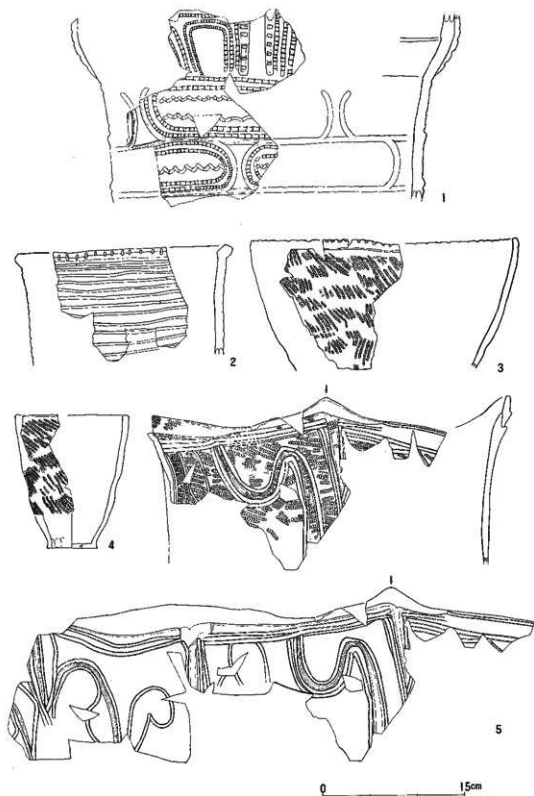
II系統

a類（挿図第14の6, 挿図第15の8, 挿図第18の30~46）

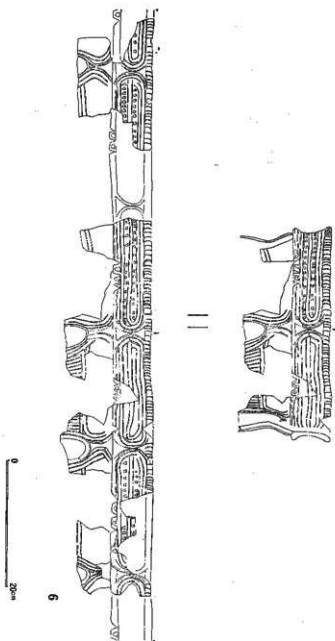
口唇部直下に半截竹管による連続爪形文が施され、薄手で焼成も良好であり、胎土に砂、石英、赤色粒子を含み、I系統と一見して異なる特徴をもった土器を本類とした。

6は口縁部がほぼめぐったもので、C字状に外反した口縁にやや膨みをもった薄手の胴部を接合している。口縁部は口唇部直下の爪形文と隆帯で楕円状に区画されている。区画内は隆帯と爪形文にそって1条、中央に2条半截竹管文を施し、その間を下方向からの刺突文を施している。この楕円区画は5単位あると思われ、刺突文のない区画が1単位観察される。胴部と口縁部の境の隆帯は、接合部分で段をもうけ作出したものである。その隆帯は楕円区画中央部分下をU字状に2個削り出し、半截竹管の刺突を施している。他の部分は板状工具でたて1条の沈線文を施している。胴部文様は楕円区画接合部下にX字状に隆帯を施し、その下に縦位の半截卵形に残る隆帯に接続している。この隆帯間は隆帯にそって半截竹管文を施した後、その間を横→縦方向に半截竹管文を構成している。第19図63など本土器と同種の土器の胴部破片であろうか。

8は薄手で口縁がゆるやかに開き、胴部はやや張った深鉢形土器である。底部を欠損するが1/5ほどえられたもので図上復元した。あるいは口径がもう少し広がる大形土器かもしれない。口唇直下の爪形文の下に、3~4条の半截竹管文を横定させた後、数ヶ所縦位の半截竹管



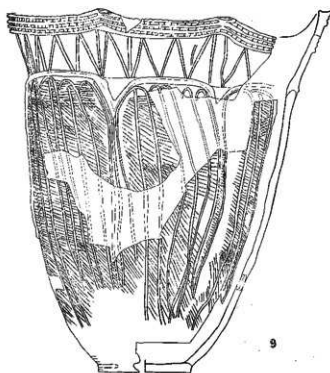
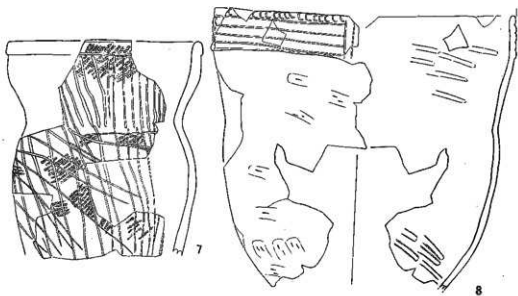
插图第13 E5 住居跡内出土土器実測図 (1)



挿図第14 E5 住居跡内出土土器実測図(2)

文で区画するらしい。胴部以下は無文で、板ケズリに近い板ナデ調整が観察される。45~47などはこの種の土器らしいが、半截竹管を押し引いた文様が見られる。

30~40は若干外反するか直立する深鉢形土器であろう。38などの波状口縁のものもある。口縁部文様は口唇部直下の爪形文、横走する半截竹管文のほか、三角形に近い刺突文を施した30, 31, 33, それに沈線文、三角沈刻文を組みあわせた37, 三角沈刻文とY字状沈刻文を組み



0 15cm

插图第15 E5 住居跡内出土土器実測図 (3)

合せた34などがある。

ほかに、やや古い要素をもつものとして42、43がある。42は北裏CⅠ式的な連続爪形文を3条施されたもの、43は縄文を施した後、三角沈刻文を交互に施し細歯状に作り出しその下に爪形文を施したものである。43など縄文を施文し三角沈刻文を交互に配するものなども古い様相をもつものであろう。41は口唇部を平に仕上げ、沈線を1条施している波状口縁のやや特異な土器である。

b類（挿図第13の3-5、挿図第18の48-50、挿図第19の52-62）

a類と同じく半截竹管文を主文様とするが、口唇部の爪形文がないもの、地文に縄文を施したものを本類とした。

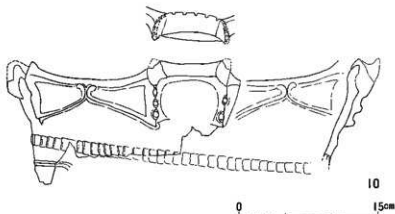
3は口縁を大きく開いた浅鉢形土器である。口唇部にキザミ目が施され、口縁部直下にうすく1条の半截竹管文を横走させ、胴部にはRL縄文が施されている。

5は口唇を2段に作り出し、若干外反した口縁に楕円形の胴部を呈し大バケット形とでもいえる特異な形態の土器である。波状口縁で突起部は2ヶ所だと思われる。文様はS字クランク状に隆帯を付した後に荒いRL縄文を施し、2段目口唇直下に2条の半截竹管文を施している。こうした隆帯間にR字状の半截竹管文を施文し文様にバラティエをもたせている。

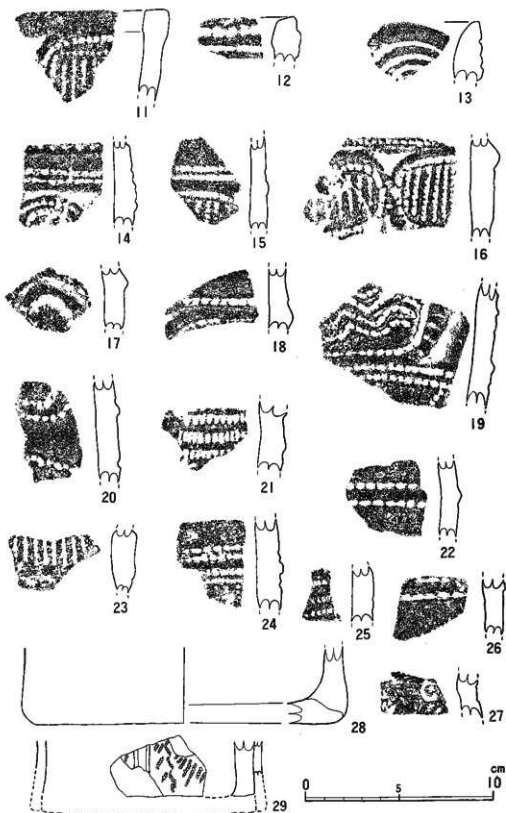
48-50は半截竹管文を口唇直下に2条横走させ、以下に縦位の半截竹管文を施している。胎土、色調より胴部文様は、縄文を施した後、半截竹管状工具でななめ方向から刺突を加えた隆帯と半截竹管を組み合せた58-62になるとと思われる。

52、53は同一個体の土器で、若干外反して波状口縁をなす。輪積痕を明確に残して段をもうけ、その輪積痕上に半截竹管を下位より押捺し、口唇部直下に半截竹管を1条横走させている。56は極く薄い土器口縁破片であり、半截竹管で区画した内部にY字状沈刻文を横位に施している。1ヶ所補修孔が見られる。55は口縁部が直立する浅鉢形土器で、口唇部にY字状沈刻文、三角形の刺突文が施文されている。64はRL縄文を施した後、口唇部を指頭によりつまみあげ凹凸をつけ、その下に2条半截竹管文を施している。

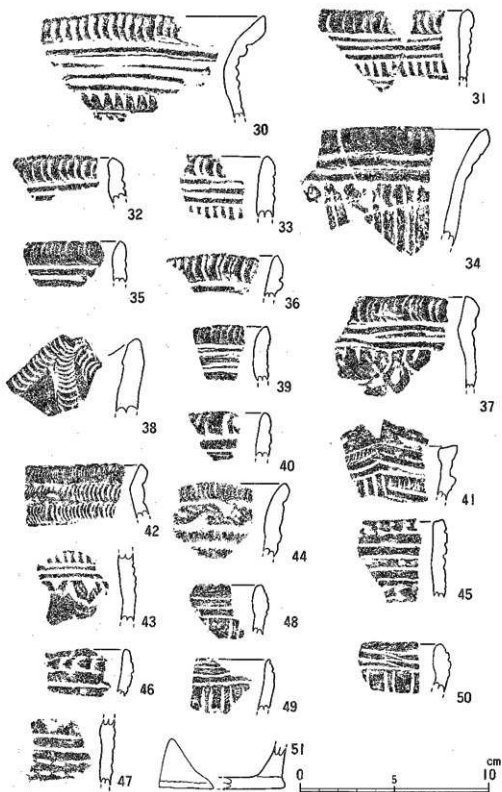
c類（挿図第13の4、挿図第15の7、挿図第19の65、66、70）



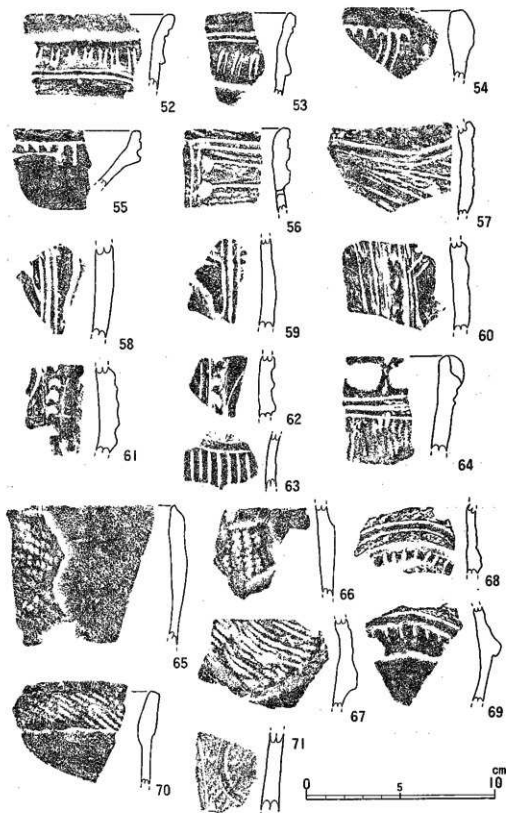
挿図第16 E5 住居跡出土土器実測図(4)



插图第17 B5 住居跡内出土土器拓影 (5)



插图第18 E5 住居跡内出土土器拓影 (6)



挿図第19 E5住居跡内出土土器拓影 (7)

縄文を多用する土器を本類とした。

7はやや張った胴部に球形の膨みをもたせた口縁をなす深鉢形土器である。口縁部には巾広の粘土帯を貼付し肥厚させた口縁を作る。器面全体にRL縄文を施文し、その縄文の一部をナデ消した後、棒状工具で口縁部は縦位に、胴部は格子目状に沈線文を構成している。この沈線文は概して荒く施文されている。70なども本土器のような口縁部破片と考えられるが、内面がやや張り出す特徴があり異なる。

65、66は同一個体の極く薄い土器である。一部剥落して不明な部分もあるが、板状の粘土を器面に貼付し、粘土板の末端は肥厚させ残し何らかのモチーフを構成するらしい。そしてその貼付した粘土板上だけにRL縄文を施文しモチーフを浮き出させている特異な文様構成をもつ土器である。

4はE5住居跡附近より出土した口縁がゆるやかにひろく深鉢形の小形土器で本住居跡と関連すると思われる参考までに図示した。

Ⅲ系統（挿図第19の67）

関西系と思われる土器を本系統としたが、67に図示した1点のみがえられた。石英、赤色粒子を多く含んだ土器でⅡ系統の中の土器に類似する。断面カマボコ形の隆帯が付された後、RL縄文を斜位に施文している。

まとめ

三系統に分類し細分を試みたが、資料の制約から細分には無理があるかもしれない。しかし、各系統の土器は明瞭に分離しえたと思われる。ある程度資料内容を知りえたⅡ系統の土器を中心として周辺地域に分布する既知の土器型式内容に検討を加え、本住居跡出土土器の編年の位置を考察したい。

I系統a類土器は梅田区画と結節状沈線文を特徴とする中部～関東地方に分布する落沢式（清水台式？）土器⁽²⁾である。第13図1の土器は隆帯や形態などすでに前段階より系統のたどれる要素であるが、文様構成、施文工具は落沢式土器段階に到している。色調、胎土に雲母を多く含む点から中部～関東より搬入されたものとも考えられる。落沢式土器については新道式との前後関係が長らく決定しなかったものの、近年長野県曾利遺跡⁽³⁾、同大石遺跡⁽⁴⁾、などのまとまった資料や、住居跡の切り合い関係などから、落沢式→新道式の編年位置が明確化された。I—
a類土器は一応新道式の要素のある土器は見られず落沢式の単純様相を呈している。I系統b類とした土器は、平出3A系と命名された土器に類似するものである。本住居跡のものは胴部文様に九弁衛尾根Ⅱ式⁽²⁾などに見られるようなY字状懸垂隆帯をもちやや古い様相を呈する反面、胴部の半截竹管文が逆U字のくずれた感のある逆J字状になっていることや、口縁部の半截竹管文が鋸歯状を呈するなど新出の要素も含んでいる。しかし、おおむね長野県大石遺跡⁽⁴⁾、同月見松遺跡⁽⁵⁾、同山溝遺跡⁽⁶⁾など、長野県の編年を考え合せると落沢式段階に伴出するものと考えて矛盾のないものである。反面、口縁部を肥厚させたり、結節状沈線文が施されているなど、

東海的な平出3A系の土器の可能性も否定しえず、今後の資料の増加をまって結論づけたい。

I系統c類土器は阿玉台系の土器である。阿玉台式土器の特徴である結節状沈線文を欠いているものの、隆帯の形状、肩状把手の特徴より阿玉台Ib式段階のもの⁽⁷⁾と判断される。

その他客体的要素の土器としてⅢ系統の土器をあげたが隆帯のモチーフは船元ⅡA式土器⁽⁸⁾に類似するものの、隆帯に爪形文が施されていないことなど若干異なる点もあるが、従来のI系統の土器の編年順などから伴出する可能性は大きく図示した。今後の資料の増加をまちたいところである。

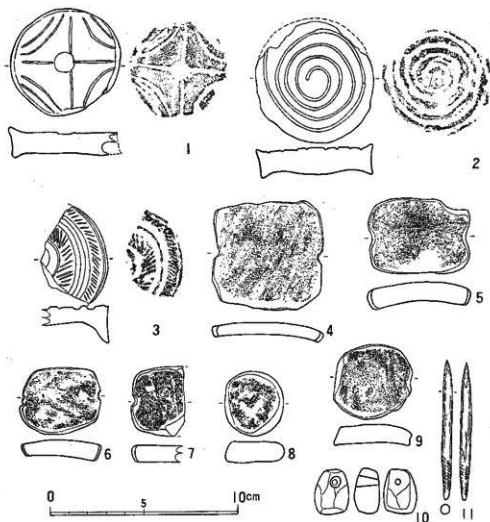
さて、問題となる東海的なⅡ系統の土器であるが、現在、筆者が知りうる限りでは良好な一括資料にはまだめぐまれていない。断片的資料として、県内のものとして長泉町西願寺遺跡⁽⁹⁾の薄手土器と報告された1部、掛川市中原遺跡⁽¹⁰⁾、県外について愛知県旭町前畑遺跡第Ⅲ群土器⁽¹¹⁾、岡南知多町清水ノ上貝塚第三群第2類C土器中⁽¹²⁾、岐阜県河合村室屋遺跡⁽¹³⁾、同美濃加茂市島崎遺跡牧野小山⁽¹⁴⁾、島崎Ⅰ式土器中⁽¹⁵⁾、岡南濃町庭田貝塚⁽¹⁶⁾、三重県尾鷲市曾根遺跡⁽¹⁷⁾、和歌山県串本町大水崎遺跡など類似資料の報告がある。これらの資料はいずれも断片的なもので、報告内容も中期初頭、五領ヶ台式、新崎式などというものである。その中で増子康真氏は比較的資料の多い前畑遺跡Ⅲ類土器に着目し、清水ノ上遺跡のものとともに竊穴式を伴う勝坂式の最も古い段階を示すものとして仮称前畑式を設定している⁽¹⁸⁾。また同氏は同段階の美濃に分布するものとして、北摂CⅠ直後型式として島崎Ⅰ式を設定している。本住居跡出土資料は、この仮称前畑式とほぼ同型式内容をもつことが認められるが、前畑式白体一括資料として内容が不明瞭で細分の可能性を含む点、およびⅡ系統B類、C類などが認められない点なども考慮して便宜上仮称大畑C-2式（大畑遺跡では鷹島式土器が出土しているため中期の2段階という意味として）を設定しておきたい。この大畑C-2式土器の分布は、前畑、清水ノ上遺跡のほか、中原遺跡、曾根遺跡のものと近似し、静岡県西部～愛知、三重県（和歌山？）に中心的に分布し、西願寺遺跡を例にすると船元式土器とともに客体土器としてさらに東へ分布する可能性がある。また客体土器は前畑遺跡の場合などから静岡県西部域～愛知（三河？）に竊穴式土器が、愛知（尾張）～三重では船元式（ⅡA式？）が伴う比率が高くなっていると思われる。

一方、美濃に分布するという島崎Ⅰ式との関連であるが、筆者の認識不足から十分に把握しえなかった。最近、増子氏は島崎Ⅰ式を細分し、北摂CⅠ→島崎Ⅰaの編年序列を与えている⁽¹⁹⁾。この中で島崎Ⅰa式の例として庭田貝塚、島崎遺跡などをあげているが、その後出の島崎Ⅰb式についての説明はなされていない。いずれにしても島崎Ⅰ式については不明な点が多く現段階では大畑C-2式との対比は難しい。

以上のように筆者の考えをまとめてみたが、大畑C-2式土器については文様要素など中部、関東的な土器というより、北陸地方に分布する新崎式、上山田古式などとの関連や、阿玉台式土器の成立、船元式土器の流入、平出3A系土器成立など多くの問題を内包したものであり、今後の資料の増加をまって次第に明らかにされるであろう。

最後にであるが、種々のご教示をえた向坂鋼二、加藤賢二の両氏に謝意を表する。

（松井一明・高野由美子）



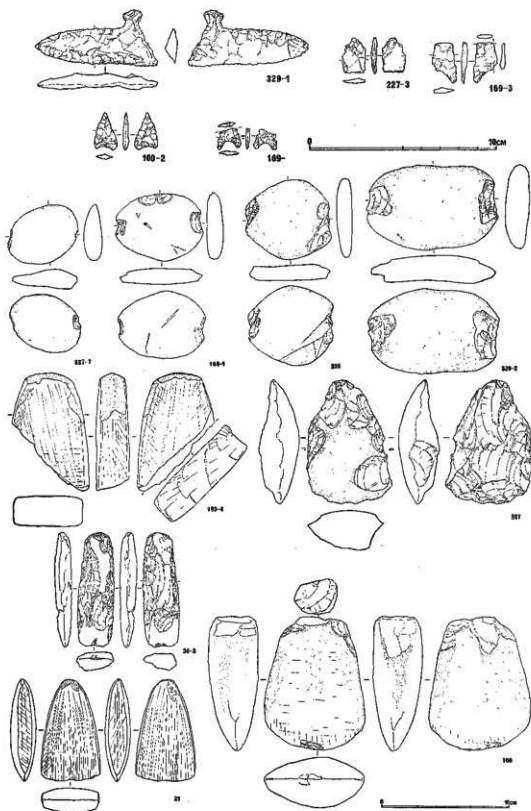
挿図第20 土製品・その他の遺物実測図

土製品 その他の遺物

その他の遺物については、興味深いものが多いが紙面の都合で第20図の11点について報告する。耳栓（第20図の1, 2）をはじめ土器片鏃等はすべて包含層中の遺物である。出土はF 4・F 5内を中心とした地区で、ほとんどがⅢa層より検出されている。玉類（第20図の10）はF 4-S E内・Ⅲa層下より出土している。石材質は硬玉系統のものと思われる。骨針（第20図の11）はE 5内の土壌より貝ブロックや獣骨といっしょに出土している。

石 器

石器は30ページの分類表のとうりチップ、フレイク等を除くと378点が出土している。ここではE-5住居址を中心に第21図の11点の紹介にのりとめた。石器番号は31ページの「昭和56年度大畑遺跡出土土器一覧表」と対照できるようになっている。その他の石器については別に報告したい。



插图第21 出土石器实测图 (实测者 西井幸雄)

昭和56年度 大畑遺跡出土石器一覧表 (第5次)

石材質鑑定 伊藤通玄

No.	石材質	分類	グリット名	遺構名	層位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
6-1	砂岩	石 錘	G4-NE		Ⅲ a 層	37.0	4.9×3.9
6-2	"	"	"		"	78.0	6.1×5.3
6-3	珪質頁岩	有茎石鏃	"		"	1.7	2.6×1.5一部欠損
6-4	砂岩	石 鏃	"		"	61.7	5.3×5.2
6-5	"	"	"		"	46.5	5.7×4.7
7	珪質頁岩	無茎石鏃	E5-SW		表 土	0.7	1.95×1.55
9	砂岩	磨製石斧	E5-SE		"	欠 損	—
10-1	珪質頁岩	無茎石鏃	"		Ⅲ a 層	0.9	1.6×1.3
10-2	黒燐石	石 鏃?	"		"	0.4	2.4×0.6
11-2	砂岩	石 鏃	F4-SE		"	52.2	5.8×5.35一部欠損
11-3	砂質頁岩	スクレイパー	"		"	37.7	5.8×4.0
11-4	"	スクレイパー	"		"	—	—
11-11	砂岩	石 鏃	"		"	8.2	2.8×2.4
11-16	黒燐石	無茎石鏃	"		"	欠 損	—
13-1	珪質頁岩	"	F5-NW		"	2.7	2.2×1.9
13-3	砂岩	石 鏃	"		"	19.7	3.5×3.6
33-6	チャート	有茎石鏃	"		"	1.3	2.2×1.3
13-7	砂岩	石 鏃	"		"	110	7.3×4.9
14	粘板岩	"	E5-SE		"	14.4	4.3×3.1
15-1	珪質頁岩	無茎石鏃	E5-SW		"	欠 損	—
15-2	砂岩	石 鏃	"		"	22.0	4.1×3.3
15-3	"	打製石斧	"		"	160	9.7×5.1
16-1	珪質頁岩	無茎石鏃	G4-NE		"	0.2	1.25×1.0
16-3	"	"	"		"	0.9	1.8×1.5
16-5	"	"	"		"	欠 損	—
17	"	有茎石鏃	F5-NW		"	欠 損	—
18	"	スクレイパー	F5-SW		表 土	欠 損	—
21	蛇紋岩	磨製石斧	E6-SW		"	115	8.0×4.6
22	砂質頁岩	石 鏃?	F5-NE		Ⅲ a 層	欠 損	—
25-1	砂岩	磨製石斧	G4-NE		"	欠 損	—
25-3	"	石 鏃	"		"	23.3	4.3×3.1
25-6	砂質頁岩	無茎石鏃	"		"	欠 損	—
25-15	珪質頁岩	スクレイパー	"		"	8.2	4.9×2.3
25-17	"	石 鏃	"		"	欠 損	—
25-20	"	無茎石鏃	"		"	欠 損	—
25-23	"	"	"		"	欠 損	—
25-31	砂質頁岩	スクレイパー	"		"	欠 損	—
25-33	砂岩	磨製石斧	"		"	欠 損	—
25-34	"	石 鏃	"		"	135	6.9×6.3
25-35	"	"	"		"	32.9	4.3×3.7
25-37	"	スクレイパー	"		"	39.2	7.4×5.2
25-38	"	石 鏃	"		"	31	4.6×4.5
26-1	珪質頁岩	有茎石鏃	"		"	欠 損	—
26-2	"	無茎石鏃	"		"	欠 損	—
27-1	黒燐石	"	F5-SW		"	欠 損	—
27-2	玄武岩	石 鏃	"		"	"	—
27-3	輝綠凝灰岩	磨製石斧	"		"	"	—
27-4	砂岩	石 鏃	"		"	19.0	8.0×7.5

表作成: 太田馬子雄・早川保子

No.	石 材 質	分 類	グリット名	造 構 名	所 位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
27-5	砂 岩	石 鍾	F5-SW		重 a 層	30.1	4.2× 3.6
27-6	珪質頁岩	有基石鍾	"		"	欠 損	—
27-7	"	石鍾(?)	"		"	"	—
27-8	"	無基石鍾	"		"	"	—
27-9	砂 岩	石 鍾	"		"	57.5	6.1× 3.8
27-10	"	"	"		"	22.7	4.4× 3.5
27-11	凝灰質頁岩	無基石鍾	"		"	欠 損	—
27-12	珪質頁岩	"	"		"	0.9	1.8× 1.3
28-1	チャート	スクレイパー?	F4-SE		"	—	—
28-3	砂 岩	磨製石斧	"		"	61.8	8.7× 3.4
28-4	珪質頁岩	無基石鍾	"		"	1.0	1.9× 1.5
30	黒曜石	石 鍾?	F5-SW		"	欠 損	—
33-3	砂 岩	石 鍾	F5-SE		"	125	6.8× 6.2
33-4	"	"	"		"	欠 損	—
33-6	珪質頁岩	石鍾(?)	"		"	欠 損	—
35	砂 岩	石 鍾	E6-SW		"	68.6	6.9× 4.6
36-2	珪質頁岩	無基石鍾	F4-SE		"	0.4	1.5× 1.3
36-3	粘板岩	打製石斧	"		"	47.3	9.0× 2.7
36-8	砂 岩	凹 石	"		"	欠 損	—
37-2	"	石 鍾	G4-NE		"	130	7.8× 6.8
37-3	"	"	"		"	175	8.7× 5.9
37-6	"	"	"		"	14.2	3.4× 3.2
37-8	砂質頁岩	石鍾(?)	"		"	欠 損	—
37-11	"	石 鍾	"		"	28	4.8× 4.4-部欠損
38-1	珪質頁岩	無基石鍾	G4-NE		"	0.5	1.7× 1.4
38-2	変輝緑岩	磨製石斧	"		"	欠 損	—
44-1	砂 岩	石 鍾	F5-SE		"	120	6.7× 6.2
44-3	粘板岩	"	"		"	30.6	6.2× 4.25
44-6	砂 岩	"	"		"	20.6	3.7× 2.6
44-8	凝灰質頁岩	ポイント?	"		"	29	3.6× 1.4
44-9	珪質頁岩	無基石鍾	"		"	欠 損	—
45	流紋岩	石 鍾	F5-SE		"	140	8.6× 6.7
47-8	チャート	無基石鍾	F5-NE		"	欠 損	—
47-10	砂 岩	石 鍾	"		"	30.8	4.9× 3.4
48-1	"	"	F6-SW		"	21.1	4.0× 3.4
48-2	"	"	"		"	26.7	5.0× 5.0
48-3	"	"	"		"	42.9	5.4× 4.5
48-6	"	"	"		"	37.1	5.5× 3.8
53	"	"	F6-NW		"	28.6	4.4× 4.0
57-4	"	"	E6-NE		"	63.1	5.9× 4.9
59-1	"	"	G4-NE		"	58.5	5.2× 5.0
59-2	変輝緑岩	打製石斧	"		"	—	—
59-9	珪質頁岩	無基石鍾	"		"	欠 損	—
59-12	チャート	"	"		"	"	—
65	砂質頁岩	打製石斧	F5-NE		"	—	—
69-1	砂 岩	石 鍾	F4-SE		"	195	8.1× 6.6
69-2	珪質頁岩	無基石鍾	"		"	欠 損	—
74-2-1	砂質頁岩	"	F6-SE	溝	覆 土	"	—

No.	石 材 質	分 類	グリット名	造 構 名	層 位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
75-1	砂 岩	石 鍾	F4-NE		Ⅲ a 層	160	8.5×6.8
75-2	珪質頁岩	無茎石炭	"		"	欠 損	—
75-4	砂 岩	石 鍾	"		"	135	6.8×6.5
75-6	砂質頁岩	無茎石炭	"		"	欠 損	—
75-7	珪質頁岩	"	"		"	2.8	2.8×1.7
81-1	砂質頁岩	"	F5-SW	溝	Ⅲ 土	欠 損	—
81-2	珪質頁岩	"	"	"	"	"	—
81-3	"	"	"	"	"	"	—
82	"	"	E5-SE	1号土城	"	1.5	2.1×1.5
87-1	"	石 鍾	H4-NE		Ⅲ a 層	2.9	4.1×2.1
87-2	砂 岩	石 鍾	"		"	20.7	4.4×3.3
87-4	"	"	"		"	23.2	4.4×3.5
89-3	"	"	H6-SW		"	90.5	6.1×5.5
89-4	"	"	"		"	82.5	7.6×4.6
89-9	"	"	"		"	20.5	3.7×3.4
89-11	珪質頁岩	無茎石炭	"		"	0.7	2.2×1.6
94-2	砂 岩	石 鍾	F5-NE		Ⅲ a 層下部	190	9.6×6.5
100	"	たたき石	F4-NE		"	635	13.5×8.0
101-1	"	石 鍾	"		"	165	7.3×6.5
101-2	凝灰質頁岩	スクレイパー	"		"	23.9	5.5×3.5
101-4	珪質頁岩	無茎石炭	"		"	0.5	1.8×1.4
101-8	砂 岩	磨 石	"		"	240	6.1×5.7
103-1	珪質頁岩	スクレイパー	F5-SE		"	欠 損	—
103-2	砂 岩	石 鍾	"		"	130	7.4×6.4
103-3	"	凹 石	"		"	95	8.1×6.2
110-1	"	石 鍾	F6-NE		"	31.5	4.8×4.1
110-2	珪質頁岩	スクレイパー	"		"	5.2	3.0×2.6
112-1	砂 岩	石 鍾	E5-SE		"	51.6	5.2×4.6
112-2	"	"	"		"	54.6	5.5×4.5
112-4	輝綠凝灰岩	"	"		"	30.2	5.1×4.2
113-1	砂 岩	打製石斧	F4-SE		Ⅲ a 層	200	11.2×7.2
113-2	"	磨製石斧	"		"	欠 損	—
113-3	"	"	"		"	390	11.6×5.0
114	"	石 鍾	"		Ⅲ a 層下部	135	7.9×6.1
118	流紋岩	"	F6-SW		"	13.7	3.8×3.2
120	黒 鋸 石	無茎石炭	F5-NE		"	6.0	1.7×1.6
123-2	珪質頁岩	"	F4-SE		"	欠 損	—
124	"	スクレイパー	"		"	2.7	2.4×2.0
126-1	砂 岩	"	F5-SW		Ⅲ a 層	10.7	4.3×3.0
126-2	輝綠凝灰岩	磨製石斧	"		"	欠 損	—
126-6	砂 岩	石 鍾	"		"	115	9.2×8.5
126-7	珪質頁岩	有茎石炭	"		"	2.6	2.6×1.8
126-8	輝綠凝灰岩	スクレイパー	"		"	77.7	5.4×5.1
126-9	砂 岩	打製石斧	"		"	90.5	10.4×5.1
127-2	珪質頁岩	スクレイパー	F6-SW		Ⅲ a 層下部	5.0	2.6×1.9
127-3	砂 岩	石 鍾	"		"	21.9	3.8×3.6
127-4	流紋岩	"	"		"	31.5	4.7×4.4
131-1	砂 岩	"	F5-NW		Ⅲ a 層	27.4	4.5×3.9

No.	石 材 質	分 類	グリット名	道 標 名	属 位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
131-2	砂 岩	石 鍾	F5-NW		Ⅲ a 層	30.7	5.1× 3.6
131-3	"	"	"		"	46.4	5.4× 4.0
131-6	流 紋 岩	"	"		"	63.0	6.5× 5.2
136-1	砂 岩	"	F4-NE		Ⅲ a 層下部	41.2	5.9× 4.8
139-1	珪質頁岩	無基石炭	E5-SE		Ⅲ a 層	1.3	2.1× 1.4
139-2	"	"	"		"	1.4	1.7× 1.7
141	変輝緑岩	磨製石斧	E5-SW		"	欠 損	—
147-1	黒 曜 石	無基石炭	F5-NE		Ⅲ a 層下部	0.4	1.3× 1.3
151-1	砂 岩	石 鍾	F6-SW		Ⅲ a 層	33.6	4.5× 3.4
151-2	"	"	"		"	48.5	5.6× 4.5
151-3	"	"	"		"	64.2	6.3× 5.5
151-4	"	打製石斧	"		"	70.2	7.7× 3.4
151-5	珪質頁岩	無基石炭	"		"	欠 損	—
151-6	凝灰質砂石	凹 石	"		"	300	7.8× 8.6
152-1	流 紋 岩	石 鍾	F5-SE		Ⅲ a 層下部	57.2	6.2× 5.2
152-2	砂 岩	"	"		"	71.3	7.0× 5.5
152-3	"	"	"		"	18.5	3.8× 3.4
153-1	"	"	H6-SW		Ⅲ a 層	欠 損	—
153-2	"	"	"		"	115	7.5× 6.4
155-2	黒 曜 石	無基石炭	F4-SE		Ⅲ a 層下部	欠 損	—
155-4	"	石 鍾	"		"	0.8	2.6× 0.8
155-5	珪質頁岩	無基石炭	"		"	欠 損	—
155-6	"	"	"		"	1.5	2.0× 1.3
155-8	黒 曜 石	"	"		"	0.7	1.5× 1.3
157-1	珪質頁岩	有基石炭	G4-NE		"	1.1	2.1× 1.4
157-5	"	無基石炭	"		"	0.6	1.9× 1.4
158	"	"	F5-SW		"	欠 損	—
159-1	砂 岩	石 鍾	F6-SW		Ⅲ a 層	73.2	6.4× 5.0
159-2	"	"	"		"	42.7	5.9× 4.2
160-1	"	"	F6-SE		Ⅲ a 層	22.1	3.9× 3.5
160-2	"	スクレイパー	"		"	110	7.8× 6.7
160-3	"	凹 石	"		"	260	7.7× 5.8
160-4	"	石 鍾	"		"	77.0	6.9× 6.0
160-5	珪質頁岩	無基石炭	"		"	4.1	2.9× 2.2
160-6	"	"	"		"	欠 損	—
160-7	砂 岩	スクレイパー	"		"	75.1	8.6× 6.8
160-8	珪質頁岩	無基石炭	"		"	2.1	2.3× 2.0
160-9	"	"	"		"	欠 損	—
160-11	砂 岩	石 鍾	"		"	17.6	4.3× 3.9
160-13	珪質頁岩	無基石炭	"		"	1.6	2.3× 1.6
160-14	"	スクレイパー?	"		"	5.1	3.5× 1.5
163-1	砂 岩	石 鍾	F5-NW		Ⅲ a 層骨集中	31.0	5.5× 4.3
163-2	"	"	"		"	40.7	4.8× 4.2
166	安 山 岩	磨製石斧	F4-NE (北)	住 居 跡	"	49.5	10.5× 6.2
167	細粒砂岩	石 鍾	F5-SW		Ⅲ a 層下部	31.2	4.7× 3.9
169-1	砂 岩	"	F6-SE		Ⅲ a 層	75.0	6.9× 5.4
169-2	安 山 岩	無基石炭	"		"	0.8	2.0× 1.3
169-3	頁 岩	"	"		"	欠 損	—
169-4	緑泥変岩	磨製石斧	"		"	"	—

No.	石 材 質	分 類	グリット名	造 構 名	層 位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
170	黒 曜 石	無基石鉄	F5-SW		Ⅲ a 層	欠 損	—
172-1	細粒砂岩	石 鍾	F5-NW		Ⅲ a 層下部	11.5	2.9× 2.5
172-2	砂 岩	"	"		"	50.0	5.3× 3.4
172-3	珪質頁岩	有基石鉄	"		"	1.1	2.1× 1.4
173-1	"	無基石鉄	F4-NE		Ⅲ a 層	欠 損	—
174	"	スクレイパー?	F6-SW		Ⅲ a 層下部	3.4	3.3× 2.0
176	黒 曜 石	無基石鉄	F5-SW		"	欠 損	—
181-2	チャート	"	F4-NE		"	"	—
181-3	珪質頁岩	ポイント?	(南)		"	"	—
181-4	砂 岩	打製石斧	"		"	"	—
181-5	珪質頁岩	スクレイパー	"		"	10.7	5.0× 2.3
184-4	"	無基石鉄	F5-NE		"	1.6	1.9× 1.9
184-6	変質礫岩	すり 石	"		"	425	8.8× 7.9
185-2	珪質頁岩	無基石鉄	F5-NW		"	欠 損	—
185-3	粘 板 岩	石 鍾	"		"	24.9	4.1× 3.6
186-1	砂 岩	"	G4-NE		Ⅲ b 層?	92.2	7.3× 5.5
186-2	"	"	"		"	18.0	3.5× 3.3
186-3	"	"	"		"	33.7	4.0× 3.8
186-4	"	"	"		"	92.9	6.4× 5.7
186-5	"	"	"		"	24.0	4.5× 4.4
186-7	珪質頁岩	石 鉄 ?	"		"	欠 損	—
190	"	スクレイパー	F6-NE		Ⅲ a 層下部	3.2	2.7× 2.4
191-2	"	無基石鉄	F6-SE		"	1.0	1.7× 1.5
191-3	細粒砂岩	磨製石斧	"		"	—	—
192	砂 岩	石 鍾	F6-NE		"	22.8	5.0× 3.5
194-1	珪質砂岩	スクレイパー	F5-SE		"	12.3	5.2× 3.2
197-2	粘 板 岩	石 鍾	F5-NE		Ⅲ a 層	15.2	3.9× 3.2
204-1	砂 岩	"	E5-NE		Ⅲ a 層下部	92.5	6.7× 5.3
204-2	流 紋 岩	"	/SE		"	44.6	5.4× 4.8
204-3	珪質砂岩	無基石鉄	"		"	欠 損	—
204-4	砂 岩	石 鍾	"		"	22.6	4.2× 4.0
205-1	"	"	E5-NE	住居址東南部	覆 土	39.0	5.4× 4.1
205-2	チャート	無基石鉄	"	"	"	0.6	2.1× 1.1
210	砂 岩	打製石斧	F5-SW		Ⅲ a 層下部	480	14.1× 9.8
211-2	流 紋 岩	石 鍾	F4-SE		"	210	9.6× 6.6
211-3	輝 緑 岩	磨製石斧	"		"	欠 損	—
211-4	凝灰質砂岩	石 鍾	"		"	32.4	5.7× 3.8
211-5	珪質頁岩	スクレイパー	"		"	4.4	3.3× 2.1
212-1	砂 岩	石 鍾	E5-NE		Ⅲ b 層	11.6	3.4× 2.8
212-2	"	打製石斧	2SE		"	欠 損	—
212-3	"	石 鍾	"		"	26.2	4.2× 3.8
212-4	珪質頁岩	無基石鉄	"		"	欠 損	—
212-5	黒 曜 石	"	"		"	欠 損	—
212-6	珪質頁岩	"	"		"	"	—
212-8	"	"	"		"	"	—
212-9	緑 色 片	打製石斧	"		"	69.5	8.1× 3.6
213-1	砂 岩	石 鍾	F5-NW		"	55.4	6.0× 3.8
213-3	珪質頁岩	スクレイパー	/SW		"	欠 損	—

No.	石 材 質	分 類	グリット名	遺 構 名	階 位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
213-4	珪質頁岩	スクレイパー	E5-NE /SW		Ⅱ b 層	5.3	2.8×2.5
213-6	"	"	"		"	欠 損	—
213-7	砂 岩	石 錘	"		"	35.7	4.5×3.8
213-8	"	打製石斧	"		"	欠 損	—
214-1	黒 曜 石	無茎石鍬	G4-NE		"	"	—
214-3	珪 質 頁 岩	石 錘	"		"	29.7	4.8×3.7
214-4	珪質頁岩	スクレイパー	"		"	1.8	1.9×1.7
217-4	砂 岩	石 錘	E6-SW	Pit 47	Ⅱ 土	125	6.6×6.2
218	珪質頁岩	スクレイパー	E5-NE	住居跡	"	5.6	3.2×2.5
219-2	砂 岩	石 錘	F4-SE		Ⅱ b 層	35.6	4.3×3.8
219-3	砂質頁岩	無茎石鍬	"		"	欠 損	—
219-4	黒 曜 石	"	"		"	"	—
219-5	流紋岩	石 錘	"		"	97.8	7.6×6.1
219-6	黒 曜 石	無茎石鍬	"		"	0.8	1.8×1.7
220	粗粒砂岩	石 錘	E6-NW /SW		Ⅱ b 層	55.0	5.5×4.0
221-1	砂 岩	"	E5-NW		"	94.2	6.2×5.7
225	黒 曜 岩	石 錘	E5-SW		"	欠 損	—
226-1	砂 岩	石 錘	F5-NW		Ⅲ b 層下部	14.8	3.4×3.2
226-2	"	"	"		"	32.8	4.9×4.2
226-3	"	凹 石	"		"	44.5	14.8×9.3
227-1	粘板岩	スクレイパー	E5-SE	住居跡	Ⅱ 土	11.2	5.2×2.3
227-7	流紋岩	石 錘	"		"	49.3	5.8×4.3
227-8	砂 岩	"	"		"	92.5	7.3×5.0
231-1	流紋岩	"	F5-SW /SE		Ⅲ b 層	73.2	7.2×6.5
231-2	粘板岩	"	"		"	21.3	10.2×3.1
233	砂 岩	"	E6-SW		"	29.7	4.4×3.9
234-1	"	"	"		"	34.5	4.4×4.3
234-2	珪質頁岩	スクレイパー?	"		"	2.8	2.3×2.1
234-3	"	無茎石鍬	"		"	2.3	2.3×1.9
234-4	チャート	"	"		"	欠 損	—
235	粘板岩	石 錘	E5-SE	住居址南東部	Ⅱ 土	77	6.6×6.3
236-1	"	"	E5-NE		Ⅲ b 層下部	25.1	3.8×3.4
236-2	砂 岩	"	"		"	115	7.8×5.7
237-1	粘板岩	"	E5-SW		"	31.5	5.0×4.4
237-2	流紋岩	"	"		"	32.5	5.5×4.8
237-3	砂 岩	凹 石	"		"	570	11.5×9.1
239-1	"	たたき石	E5-NE		"	635	10.6×8.0
239-2	"	凹 石	"		"	1730	12.8×10.1
244	細粒砂岩	石 錘	F5-NW		Ⅲ b 層	62.5	5.5×5.2
248-1	珪質頁岩	スクレイパー?	"		"	3.4	2.9×2.7
248-2	砂 岩	スクレイパー	"		"	55.3	8.2×6.2
248-6	"	打製石斧	"		"	欠 損	—
255	"	すり石(?)	E5-NE /SE	住居跡	Ⅱ 土	605	12.3×10.2
256-1	凝灰質頁岩	無茎石鍬	"		"(跡中)	1.0	2.4×1.4
256-3	珪質頁岩	"	"		"	1.4	2.2×1.5
256-4	"	スクレイパー	"		"	13.2	3.5×3.4
258-3	砂 岩	石 錘	"		Ⅱ 土下部	43.6	5.0×5.0
261	細粒砂岩	"	F5-NE		Ⅱ b 層	28.7	4.2×3.7

No.	石 材 質	分 類	グリット名	通 橋 名	購 位	法 型	
						重量(B)	長軸×短軸(cm)
262-1	珸 岩	磨製石斧	F6-NE		Ⅲ b 層	欠 損	—
262-2	黒 曜 石	無茎石鏃	"		"	0.7	1.9×1.3
268	砂 岩	凹 石	F4-SE	集石遺構	"	975	9.6×10.0
270	砂 岩	"	"	"	"	240	15.1×9.4
271	細粒砂岩	凹 石	"	"	"	2400	19.4×14.2
273	凝灰質頁岩	サイド スク レイバー?	E6-SW		Ⅲ b 層	24.5	6.4×2.7
275	砂 岩	凹 石	F5-SW		"	1250	12.5×9.2
277	"	たたき石	F5-SE		"	660	12.2×8.6
283	"	石 鏃	F5-SW		"	105	6.5×5.5
284-4	珸質頁岩	無茎石鏃	F4-SE	集石遺構	覆 土	1.6	2.2×1.7
285	砂 岩	石 鏃	E5-SE	住 居 跡	"	185	8.7×5.3
286	"	"	E6-SW	"	"	170	8.5×6.2
287	"	打製石斧	"	"	"	215	9.9×6.7
288	"	"	"	"	"	69.2	8.7×5.1
289	"	"	"	"	"	165.0	10.8×6.8
290	"	"	"	"	"	165.0	9.9×8.7
293	"	凹 石	F4-SE	集石遺構	"	2600	21.9×11.4
296	粘 板 岩	ポイント?	F5-NE	Pit 65	"	3.0	3.7×1.6
300	砂 岩	石 鏃	F5-NW /NE		Ⅲ b 層	53.8	5.0×3.4
302-1	"	"	F6-SW	南西土城	覆 土	20.3	4.4×3.0
302-2	"	"	"	"	"	32.3	5.3×3.9
304-1	"	"	F4-SE		Ⅲ d 層	90.0	6.8×4.5
307-2	粘 板 岩	"	G6-NW		Ⅲ a 層	33.5	4.3×4.3
307-3	砂 岩	石鏃(?)	"		"	欠 損	—
307-4	"	石 鏃	"		"	190	8.0×7.0
309	珸質頁岩	スクレイパー	F4-SE		Ⅲ b 層	11.3	3.8×2.6
311	黒 曜 石	無茎石鏃	"	Pit 74	覆 土	0.5	1.5×1.2
314-2	砂 岩	石 鏃	H5-SW		Ⅲ 層	160	8.0×5.6
314-4	"	"	"		"	75.6	1.7×1.5
314-5	珸質頁岩	無茎石鏃	"		"	1.1	7.1×5.1
314-6	輝緑凝灰岩	打製石斧	"		"	—	—
314-8	砂 岩	石 鏃	"		"	150.5	6.5×6.2
314-9	砂質頁岩	スクレイパー	"		"	5.6	3.7×1.7
314-10	珸質頁岩	無茎石鏃	"		"	欠 損	—
314-14	ホルンヘルズ	石 鏃	"		"	27.9	4.5×4.3
315-1	砂 岩	"	H5-SE		"	欠 損	—
315-2	粘 板 岩	"	"		"	"	—
315-3	珸質頁岩	石鏃(?)	"		"	"	—
315-5	砂 岩	石 鏃	"		"	32.9	4.8×4.2
315-7	細粒砂岩	"	"		"	30.5	5.1×3.1
315-8	珸質頁岩	スクレイパー	"		"	3.6	2.5×1.9
316-1	砂 岩	石 鏃	H4-SE		"	50.1	5.1×5.0
316-3	"	"	"		"	76.6	5.1×5.3
316-5	"	打製石斧	"		"	欠 損	—
316-6	"	"	"		"	"	—
316-7	細粒砂岩	石 鏃	"		"	27.5	4.3×4.3
320-3	砂 岩	"	"		"	30.3	4.4×3.6
321-2	"	"	H5-NW		"	260	9.0×7.6

No.	石 材 質	分 類	グリット名	遺 構 名	層 位	法 量	
						重量(g)	長軸×短軸(cm)
321-4	砂 岩	石 鍾	H5-NW		Ⅲ 層	42.4	5.1× 3.8
321-5	"	"	"		"	30.7	4.8× 3.8
321-6	"	"	"		"	20.4	4.0× 3.6
322-2	"	"	"		"	82.3	6.2× 5.3
323-1	"	"	H5-NE		"	205.0	8.1× 7.7
323-5	珪質チャート	スクレイパー	"		"	8.2	3.2× 3.0
324	砂 岩	石 鍾	G6-SW		"	24.8	5.1× 3.4
327	"	"	H5-NE		Ⅲ層下部	24.3	5.0× 3.6
328-3	珪質頁岩	有茎石跡	"	Pit 75	覆 土	2.3	3.1× 1.8
329-1	"	石 此	E5/6	住 居 跡	"	12.3	6.5× 3.1
329-2	砂 岩	石 鍾	"	"	"	23.0	10.3× 6.8
332-4	細粒砂岩	"	G5-SE		表 土	18.6	3.8× 4.1
332-5	流 紋 岩	"	"		"	120.0	6.7× 6.7
332-9	輝緑凝灰岩	打製石斧	"		"	欠 損	—
332-14	砂質頁岩	スクレイパー	"		"	11.5	3.6× 2.9
332-15	黒 曜 石	無茎石跡	"		"	欠 損	—
332-16	頁 岩	石 鍾	"		"	41.2	4.1× 3.8
332-17	珪質頁岩	スクレイパー	"		"	14.6	8.5× 8.7
332-18	砂 岩	石 鍾	"		"	68.9	5.9× 4.4
332-19	"	"	"		"	33.6	5.5× 3.9
332-20	"	"	"		"	31.7	4.5× 3.6
332-23	チャート	無茎石跡	"		"	欠 損	—
332-24	泥質頁岩	打製石斧	"		"	欠 損	—
337-1	細粒頁岩	スクレイパー	"		Ⅲ b 層	33.7	6.3× 5.5
337-3	砂 岩	打製石斧	"		"	欠 損	—
337-6	輝緑凝灰岩	石 鍾	"		"	31.8	5.0× 2.7
339-2	珪質頁岩	無茎石跡	G4-SE		Ⅲ a 層	欠 損	—
339-3	砂 岩	打製石斧	"		"	"	—
339-4	"	石 鍾	"		"	"	—
339-5	"	"	"		"	30.0	9.1× 9.0
341-1	"	打製石斧	F5-SE		Ⅲ 層	341	12.4× 6.5
341-2	"	石 鍾	"		"	24.8	4.6× 3.2
341-3	流 紋 岩	"	"		"	45.5	5.6× 4.6
341-4	砂 岩	"	"		"	15.6	3.3× 2.6
342-1	"	"	G4-SE		Ⅲ b 層	53.1	5.1× 4.7
342-4	"	"	"		"	22.9	4.2× 3.2
345-2	珪質頁岩	石ベラ?	G5-NE		Ⅲ a 層	33.9	7.0× 4.0
345-3	砂 岩	石 鍾	"		"	100.0	6.9× 5.8
349-2	流 紋 岩	"	E5/6	住 居 跡	覆 土	43.8	5.3× 5.1
349-3	砂 岩	"	"	"	"	83.0	6.9× 5.2
350-1	"	"	G5-SW		Ⅲ a 層	22.5	4.0× 3.3
350-2	"	"	"		"	58.2	5.5× 5.2
350-3	"	"	"		"	80.4	6.6× 5.3
350-5	"	"	"		"	43.2	5.1× 3.2
350-8	"	"	"		"	29.2	4.6× 3.3
350-11	"	打製石斧	"		"	欠 損	—
351	"	石 鍾	F/G5/6	土 塊	覆 土	27.3	4.9× 4.3
354-2	珪質頁岩	スクレイパー?	F4-SE		Ⅲ a 層	7.3	3.3× 2.5
354-3	凝灰質チャート	ポイント?	"		"	6.3	3.2× 2.2
360	珪質頁岩	無茎石跡	F-6		Ⅲ a 層下	0.8	1.7× 1.4

第5節 出土人骨について

山口 敏

昭和56年度調査にさいしては、E6-c2北側のセクションベルト内とその付近でややまとまった人骨片が発見されたほか、F6-b2の小土坑で頭骨のみが1点発見された。

E6-c2 人骨片

採りあげられた資料は、9月16日付No.66、9月17日付No.70、9月30日付No.151、No.155の4群である。No.66とNo.70は北側セクションベルト整理のさいに出土したものであり、No.151とNo.155はセクションベルト内で出土したものである。

No.66は頭蓋冠の小破片多数からなっていたが、破片の接合を試みた結果、右頭頂骨内側半の後約3分の2と、矢状縫合後部約5cmを介してこれに接合する、左頭頂骨内側半の約4分の1が復元された。このほかに後頭鱗の小破片数点と、径約2cm以下の頭蓋冠細片約30点があるが、保存状態がわるく、断端が崩壊し、接合することができない。右頭頂骨後頭縁で約25mmにわたって観察できる人字縫合に閉鎖の兆候はみられないが、矢状縫合の後部は部分的に閉鎖している。右頭頂骨の厚さは、頭頂結節部において8mm、ラムダ付近において6mm、中央部において7mmである。頭頂結節は顕著でない。頭頂孔は左にのみ存在する。本頭蓋片は熟年男性のものと推測される。

No.70は、大腿骨骨幹の、長さ9cm以下の縦切片3点と、若干の細片からなっている。骨幹径の計測はできないが、ピラステルが強く、縦密質が著しく厚いところから、成人男性のものと考えられる。

No.151も大腿骨骨幹の破片であるが、No.70に比して縦密質はかなり薄く、保存状態も異なるため、同一個体に属するものとは考え難い。主な破片は、右骨幹上半部と思われる長さ約5cmのもので、骨幹中央部と推定される位置での矢状径は23.5mm、横径は24mmと、かなり細い。断面示数も97.9と比較的小さく、柱状性は強くない。

No.155は、後頭骨上鱗の破片などを含む頭蓋冠の小片約20点と若干の細片、左乳様突起の起部片、左右の下顎体片、右(?)下顎角片からなっている。頭蓋冠破片の保存状態、色調、厚さ等は、No.66のそれと類似しており、おそらくは同一個体に属するものと思われるが互いに接合できる破片はない。後頭骨上鱗の正中矢状彎曲は弱く、外後頭隆起も強くない。上矢状洞溝は主として右横洞溝へ向っている。左外耳道上縁に道し牌が認められる。大臼歯部の歯槽を含む左右の下顎体が保存されているが、歯は全く失われている。底縁が破損されているため計測はできないが、体高は低いと思われる。下顎角には、内・外両面とも筋粗面がよく発達している。

E6-c2人骨の出土状態の実測図を見ると、骨片の配列は西頭位の伸展葬を思わせるのであるが、骨片の多くは粉状で採りあげることができず、しかも、採りあげられた骨片に少なくとも2個体が区別されるので、本資料の埋葬様式には疑問符を付しておきたい。

F6-b2 頭蓋片

円形の土壌内で発見され、10月19日に採りあげられた番外資料。後頭鱗の中央部、約5×5cmの破片、頭蓋冠の小片、細片数点、それに下顎体の小破片が含まれている。出土状態の記録写真では、頭蓋の概形を認めることができるが、骨の保存状態はきわめてわるく、採りあげられたのは上記の骨片のみに留まったものである。

頭蓋冠破片の厚さは成人のそれにほぼ相当する。後頭鱗の外表面は保存状態がわるく、外後頭隆起などの形態は明らかでない。内面の上矢状溝は主として右横溝溝につらなる。下顎体の小片は、右(?)の第2小臼歯と第1大臼歯の各歯槽を含む部分であるが、歯は失われ、体の底側半も欠損し、保存状態はきわめてわるい。骨体緻密質の破損部で、第1大臼歯歯槽の下に埋伏歯が認められた。この埋伏歯は咬合面を近心方向に向けた歯冠エナメル質のみを残しており、歯冠ゾググ質および根は全く失われている。歯冠の径は8.6×7.3mmと比較的小さいが、5個の咬頭をもっており、エナメル質形成不全の痕もとどめている。退化形の第3大臼歯または過剰歯のいずれかであろうと考えられる。

この頭蓋は成人またはそれに近い年齢のものと思われるが、性別は推定できない。

散乱人骨片

上記のほかに、E5-SEとF5-NWで獣骨と混在して発見された散乱人骨片がある。いずれも9月17日に採りあげられたもので、E5-SEのNo.71は成人大腿骨骨幹の小破片。計測はできないが、骨質厚く、ピラステルも強い。F5-NWのNo.76は左右側頭骨の小片、下顎骨左側の破片、頸椎の椎体1点、左鎖骨の小片を含む。左側頭骨の小破片に道上線が認められる。下顎骨は、保存の状態がわるく、計測できないが、体は低く、肢の幅は中等程度である。歯は保存されていない。頸椎椎体に老年性の変化は認められない。

ま と め

昭和56年度出土人骨はいずれもきわめて断片的であるが、下顎体の低さや大腿骨骨幹のピラステル形状などに、縄文時代人骨の特徴を認めることができる。

E6-c2の人骨片は、1個体分と見える配列をもって出土したが、採りあげられた骨片には2個体分が認められた。

F6-b2の墓坑は頭部のみの埋葬であるが、骨の保存状態がわるく、この埋葬の特殊性を説明できるような手がかりは全くえられなかった。しかし本人骨では、興味ある矮小人臼歯型の埋伏歯が下顎骨体内に認められた。

第6節 出土の脊椎動物について

金子 浩 昌

昭和156年度においてはかなり多量の獣類遺体が発見された。その大部分はイノシシ、シカの歯牙、骨角であったが、その他にも特殊な種類のものが含まれていた。それらの概要について報告する。

検出された脊椎動物遺体

I 脊椎動物 Vertebrata

硬骨魚綱 Osteichthyes

ニシン目 Clupeiformes

1. ニシン科の一種 Clupeidae gen. et sp. indet.

コイ目 Cypriniformes

2. コイ *Cyprinus carpio*

ウナギ目 Anguilliformes

ウナギ科 Anguillidae

3. ウナギ *Anguilla japonica*

ボラ目 Mugiliformes

4. ボラ科の一種 Mugilidae gen. et sp. indet.

スズキ目 Perciformes

スズキ科 Serranidae

5. スズキ *Lateolabrax japonicus*

タイ科 Sparidae

6. クロダイ *Acanthogagrus sahlegeri*

フグ目 Tetraodontiformes

7. マフグ科の一種 Tetraodontidae gen. et sp. indet.

カレイ目 Pleuronectiformes

8. ウシノシタ科の一種 Cynoglossidae gen. et sp. indet.

II 両生綱 Amphibia

無尾目 Anura (Salientia) fam. indet.

III 爬虫綱

有鱗目 (ヘビ亜目) Ophidia fam. indet.

IV 鳥 綱 Aves

ガンカモ目 Anseriformes

ガンカモ科の一種 Antidae gen. et sp. indet.

V 哺乳綱 Mammalia

食肉目 Canivora

イヌ科 Caniidae

1. オオカミ *Canis lupus*
2. イヌ *Canis familiaris*
3. タヌキ *Nyctereutes procyonides*

昭和56年度において出土した脊椎動物遺体は魚綱8種、両生綱1種、爬虫綱1種、鳥綱1種、哺乳綱3種という種類であった。このうち魚類で数種、その他種属不明の骨もあり若干はふえるであろう。

魚類の遺体については、貝層のブロックサンプリングの資料がないために、量差についての内容の知り得ないのが惜まれるが、全般的には魚骨の含まれる量は少なかった。例えば、中形以上のクロダイの顎骨（前上顎骨、歯骨）は僅かに5点であったことを見ても、こうした魚骨の含まれる率の低いことがわかる。

その他の魚種はウナギの場合も含めたとして、いずれも小椎骨の出土であって、小形種あるいは未成年魚であった。それが椎骨標本の大部分であったのである。なお、クロダイにも前上顎骨でその全長10.5mmという小形のものがあり、椎体中にそれに該当する標本もあった。またフグの顎骨も、全長10.1mm位のものであった。小魚類が主として対象となる漁獲あるいは、小魚類を含み易い漁獲があったと推定される。

両生、爬虫のいずれも数点の骨である。鳥類も脛骨片一点出土したのみである。

獣骨はイノシシ及びシカを主としてかなり多くの遺体が出土している。その詳細は別の報告で述べるが、シカの歯、顎骨、脛骨の出土がイノシシよりもはるかに多く、例えば該骨の量差を知るのに手近かな方法としてよく使われる後肢の距骨、踵骨の数を比較してみると、シカでは距骨（R16, L24）、踵骨（R9, L11）であり、イノシシでは距骨（R4, L2）、踵骨（R0, L1）といった違いである。このことは狩猟の性格をみていく場合の一つの重要な証拠を提供するものとなろう。その他年齢構成、加工等については別稿でのべたい。

上記の二種を除くと、獣の種類は著しく限られるが、一点のタヌキの歯 P⁴とともに、オオカミの歯を出土したのは注目される。

オオカミの標本は右側の P⁴M¹⁻² という上顎歯である。オオカミの遺骸の出土は、縄文期の貝塚の場合、イノシシ、シカなどと比べてはるかに少ない。しかも、上顎歯の出土する例はさらに少ないのである。このことは、縄文人がオオカミを捕獲できる機会や頭数の稀有であったことを示すものであると同時に、その解体の方法などにも由るのであろう。これについても

また別に詳細をのべたい。

イヌは埋葬の一例と、その他一括してあげられている骨の中には埋葬例も含まれるので5～6体分の骨はあったのではないかと推察されている。イヌ遺体の出土は縄文後期以後増加するが、本貝塚は多い方であろう。また、イヌはすべて小型犬に属するものであった。

昭和55・56両年の発掘調査において出土した動物遺体を通覧してみて、その両者の間の遺物の出土量には大きな差があったが、全体の性格においては共通する面が多かったのではないかと思う。遺物の量差については、調査地点での差異であり、獲物の解体処理などの加工の場所による違いなのであろう。

昭和56年度調査地点におけるシカ及びイノシシの骨の出土、特にシカの骨の出土は多く、筆者らがみる機会の多い関東地方の同時期の貝塚などに比べてかなり多いのではなかろうか。遺跡周辺の小笠丘陵により恵まれた狩猟環境のあったことを裏付けるのであろう。また本遺跡でのイヌの遺骸の比較的多いことも注目されよう。また正確な個体数を調査し終っていないが、埋葬を推測される個体もあり、この地方のイヌの形値を知るのに好資料といえよう。

また、そのような貝塚の動物相、数量については、この地域に隣接する磐田市内諸貝塚との比較に興味をもたれる。大畑遺跡での狩猟の在り方が、これにつづく例えば磐田市西貝塚などでどのように見られるか。基本的には似た狩猟がみられながら、やはりより盛行していく様子を見ることができるようであるが、これについてはまた別にのべたいと思っている。

大畑遺跡資料の調査にあたって種々の御配慮いただいた静岡大学市原寿文教授に御礼申し上げますとともに、整理面で御協力、御表示を得た袋井市教育委員会の皆様に対して御礼を申し上げる次第である。

第7節 土器の胎土分析

清水 芳裕

大畑遺跡E 5住居址から出土した一括資料のうち、8点の土器について分析をおこなった。試料は遺跡調査の整理番号にしたがって388~403で表わしている(表1)。その中で個体別あるいは型式別の胎土組成の差と製作地の同定を主要な目的として、岩石学的分析によって胎土の岩石鉱物の種類と含有量を、蛍光X線分析によって元素組成の特徴を調べたものである。なおここでは、当遺跡の土器の組成をより明瞭に知るため、西方約7kmにある磐田市西貝塚出土の官渡式土器の分析結果が得られているので、適宜比較をおこなっている。ただしここでの結果は、分析点数が少なく、大畑遺跡の同時期の土器組成を代表するものではなく、あくまでも基礎資料の一部である。

岩石学的分析

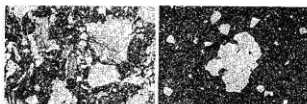
土器を薄片にして偏光顕微鏡によって岩石と鉱物を同定し、大畑遺跡の立地する地域の地質構成物と一致するかを識別する方法をとった。分類にあたっては、特徴をもつ岩石鉱物の有無を基本にしているが、含有量に差が著しいものもあるため、ここでは一試料内での相対的な量比も求めて、4~1で表わしている。これは絶対量から割り出したものではなく、カラー・インデックスの方法によって求めているので、大まかな相対量比と考えた方がよい。識別可能な岩石鉱物のうちほぼ半ばを占めるものを4、微細な結晶として数点存在するものを1として、4>3>2>1の関係をもつ。したがって各資料間の比較をおこなう上で、個々の土器組成の特徴を知るには有効である。

表1 胎土の含有岩石鉱物

分析試料	胎土の含有 岩石鉱物	含有量(相対量比)													
		石英 波動消光 形状	微斜長石 波動消光 形状	斜長石 波動消光 形状	角閃石 波動消光 形状	白雲母 波動消光 形状	輝石 波動消光 形状	ジルコン 波動消光 形状	カンラン石 波動消光 形状	花崗閃緑岩 波動消光 形状	砂岩 波動消光 形状	粘土岩 波動消光 形状	結晶 波動消光 形状	片岩 波動消光 形状	頁岩 波動消光 形状
388 中期初頭	4 3	3	2	3	2	1	1	-	1	2	-	-	2	2	-
389 平出式ⅢA	4 3	3	2	1	2	1	-	-	1	2	-	-	2	3	2
396 大畑C2式	4 4	2	2	2	2	1	2	1	1	2	2	2	-	-	2
397 中期前半	4 4	2	2	2	1	2	1	1	2	1	2	-	2	-	-
398 平出式ⅢA式	4 4	2	2	2	1	3	2	-	2	2	2	-	2	2	2
401 大畑C2式	4 4	1	3	2	-	-	1	1	-	-	-	-	2	2	2
402 阿玉台系	4 4	2	1	2	2	-	2	-	-	2	2	-	-	-	-
403 五郎ヶ台式	4 4	2	-	2	2	1	2	1	1	2	-	-	-	-	2

(土器型式名は、第5章第3節の表現によった。)

胎土の特徴について説明する。いずれの土器の岩石鉱物も腐食の進んだものが多く、これは粘土とともに二次的に堆積した砂粒が多いことと関係している。含有量の面からみていくと、398には角閃石を中心とする有色鉱物が多く(挿図第22-1)、401では有色鉱物が非常に少なく、石英と長石類が大部分を占め、この点で他と異なっている。また、すべての土器に波動消光の石英、パーサイト構造の角閃石、微斜長石、花崗閃緑岩の岩片など深成岩起源のもの、いずれかが含まれている。これに對して火山岩起源のものはほとんど



1. 角閃石、輝石類 (試料398、一ニコル、28倍) 2. 融食形の石英 (試料401、十ニコル、14倍)

挿図第22 胎土の岩石鉱物

ど含まれておらず、401に融食形の石英がみられるだけである(挿図第22-1)。このほかに388, 389, 396, 401, には砂岩, 泥岩, チャートなどの堆積岩が目立つ。

さて、大畑遺跡が立地する丘陵一帯は、小笠山礫層などの段丘堆積物で形成され、前面は沖積地となっている。さらに広くみていくと、天竜川流域に中世世界白亜系の各種片岩が、また遺跡から約10km以北の天竜川左岸には同時代の凝灰岩質頁岩や凝灰岩が分布する。このような地質条件からみて、土器の含有物に深成岩起源の特徴が強くあらわれ、これに堆積岩類、変成岩類が加わっていることから、8点の土器は遺跡を中心とするこの一帯で製作されたと考えて矛盾はない。ただし401の融食形の石英については、ごく少量であり地質堆積物の供給をかなり広い地域からと想定すれば、製作地を異にするものとして積極的に取り上げる現象ではないが、有色鉱物が特に少ないという特徴もそなえており、有色鉱物が特に多い398とともに胎土組成の上から差が認められる。さらに全体として西貝塚の土器の組成と比較すると、西貝塚では火山岩起源の安山岩や黒雲母片岩、ミロナイトなどの変成岩および砂岩、泥岩を中心とする堆積岩の影響が大畑遺跡の土器のそれよりも強い。とくに変成岩の含有率が高いことは注目される。このことは、大畑遺跡付近では西貝塚付近と比べて天竜川左岸に分布する変成岩の影響が少ないことを示しているものと考えられる。

蛍光 X 線分析

分析試料は薄片にしたものと2分して、エアブラシで表面を洗浄後タングステンカーバイド製の乳鉢で粉砕し、200メッシュの網を通過する程度にそろえた。1.0gを秤量し、厚さ50 μ mのマイラー膜上で圧縮成形し、分析はこの膜を通しておこなった。励起は放射性同位元素の ^{55}Fe と ^{106}Cd からのX線を用い、試料からの蛍光X線は波長非分散型のSi(Li)検出器で測定した。 ^{55}Fe で励起する場合は窒素ガスで置換してKCa, Tiを、 ^{106}Cd では空気雰囲気のままMn, Fe, Rb, Sr, Y, Zr, Nbの元素を測定した。各元素の含有量は、電子計算機で計算しその結果をもとに特に検出精度が劣るMn, Nbや試料間の含有量の変動が特に大きい元素を除いて、ここではTi, Fe, Sr, Zrの4元素を選択しその含有量からクラスター分析によって胎土組成の比較をおこなった。元素組成の近似するものから順に組み合わせさせて枝ができ、任意の高さで切るといくつかの群に分けることができる。この場合、高い位置で組み合わせるほど元素量の類似する確率は低くなる。挿図第23のうち試料番号を付したものが大畑遺跡の土器で、ほかは西貝塚の土器である。破線の位置で切ると、大畑遺跡と西貝塚の土器がそれぞれ大きく2群にわかれ、さらに大畑遺跡の398が1点だけ西貝塚の土器組成に近似していくという結果が得られた。これは他の周辺の遺跡の土器と比較をしていないので、大畑遺跡の土器とは大きくわかれる別の一群へ入るという事実が重要で西



貝塚の土器組成との近似性を強調するものではない。

分析結果

胎土の岩石鉱物の組成と地質の比較から、8点の土器はすべて遼跡を中心とする地域で製作されたものと考えて矛盾はない。一方、蛍光X線分析による元素組成の面からみると、大畑遼跡の土器は大きく2群と398の1点とに分かれる。このことは原材料の個体差にも起因するものであり、則座に製作地の異同を結論づけるものではない。ただ398については、岩石鉱物の分類で有色鉱物がとくに多いことと、元素組成でこの1点だけ大畑遼跡の土器群から離れることから、明らかに原材料に差があったことを示しており、また401についても火山岩起源の磨食形の石英を含むことと有色鉱物が非常に少ない点で同様のことがいえる。この2点がこのような差をもつことの具体的な理由は、ここで明らかにすることはできないが、分析点数を増加することによって、大畑遼跡出土土器組成のまとまりがさらに明瞭になれば、胎土の選択や製作地の細別にせまる情報が得られるものと考えている。

蛍光X線分析は京都大学原子炉実験所東村研究室の施設を使用させていただき、桑科哲男氏には多くの御指導と後援助を賜った。お礼申し上げる次第である。

※ 分析資料は本概報の実測図と次のように対応する。

No. 388.....挿図第15の7

No. 389.....挿図第15の9

No. 396.....挿図第15の8

No. 398.....挿図第13の1

No. 401.....挿図第14の6

No. 402.....挿図第16の10

No. 403.....挿図第13の5

第6章 総 括

昭和56年度発掘範囲はE 4～6, F 4～6, G 4～6, H 4・5, I 4・5グリッドにかけての約 800m²である。昭和52・53年度の発掘範囲と部分的に重複しており、遺跡全域における位置としては、55年度発掘調査概報第7章にのべた遺跡最高部分のはゞ中央に位置しているといえる(本編挿図第3参照。本発掘区画を遺跡全体の地形図にプロットするためには、昭和55年度発掘調査概報以下「昭和55年度概報」⁽²⁾と略称一の挿図第2を参照されたい)。

本発掘範囲における遺物包含層は第Ⅰ層下半部及び第Ⅲ層である。昭和52年度発掘調査における層序を基本として考えるならば、昭和56年度の第Ⅰ層には、昭和52年度に分層して扱った覆土層・第Ⅰ層・第Ⅱ層を一括して含めている。それは発掘範囲において3土層の分離が困難だったからである。52年度に確認した層序は、大畑遺跡の基準としてきた事実である⁽³⁾。これと対比すると56年度には第Ⅱ層という層位を欠いているが、これは52年度第Ⅱ層相当層を、56年度には第Ⅰ層中に含めているからである。

56年度第Ⅰ層下に続く層は第Ⅲ層である。第Ⅲ層は上半をⅢa層、下半をⅢb層として分離した。

56年度第Ⅰ層、Ⅲa層、Ⅲb層における土器等の包含状況は次のようになっている。

第Ⅰ層下部は、耕作その他の擾乱をほとんど受けていない部分であり、包含遺物としては後期末の土器型式を主体とするが、遺物の包含量は多くない。

第Ⅲ層上半、即ちⅢa層中の土器は、中期後半～後期前半の土器であり、同層下半即ちⅢb層中の土器は中期前葉を主体とし、中期後半～後期前半までの土器を伴出した。第Ⅲ層をa・bに細分したのは機械的に上半・下半に分離したのではなく、土壌構成の変化および土器の包含状況と対比してのことである。

56年度発掘の第Ⅰ層下部・第Ⅲa層・同b層中に、52・53年度に確認したような先史地表面が含まれているかどうかの問題がある。少なくともⅢa層においては、土器片・鏃・獣骨・焼土塊の出土状況から、重複する先史地表面が存在することは疑いえないところであるが、これを面的に露出する時間的余裕に恵まれなかったので全面的に検出することを制受した。

中期前葉の土器を主体的に包含するⅢb層中にも、等しく先史地表面が重畳して存在したかは疑問である。存在したとしてもⅢa層におけるよりも鏃な状態でみられるにとどまったものと思われる。

本報告書の第5章第3節・遺物の項においては、中期前葉の土器だけを記述しており、同後半、後期、晩期の土器は説明を省略している。理由は印刷費の制約によるものである。説明を加えておくならば、第Ⅰ層下半部よりⅢa層にかけて特に目立った土器として55年度発掘において分類したⅡ群d類土器⁽⁴⁾＝加賀利BⅠ式土器併行期のものがかなりの量検出されている。これは、55年度発掘のⅡ群b類土器＝堀之内Ⅰ式土器併行期のものに混在するのであるが、Ⅱ群d類土器としたものが一定量まとまって出土した地域は、昭和26年度～55年度にかけての4回

におよぶ発掘において本年度発掘地点のみであることは注目してよいと思われる。このことは、大畑遺跡が地点によって時期的に差のある遺物を包含していることを物語っているように思われる。

また、大畑遺跡は従来縄文後期を主体とする遺跡として理解されてきた。しかるに、55年度発掘においてはⅠ群土器 a～j 類に分類した中期の土器が検出された。このうち最も量的にも多く主体をなす土器はⅠ群 e～j 類土器＝中期最末期の土器であった。55年度発掘資料の分析を行なった吉岡伸夫の観察結果によれば、その出土量は後期の土器出土量を凌駕する量であるという。今回発掘資料中にもこの時期の土器はかなり存在するのであるが、それに加えて56年度発掘においては本篇第5章3節において、Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ系統として分類整理されている土器が検出された。この土器は55年度Ⅰ群 d 類土器⁽⁶⁾としているものと併行関係にある。本類土器がわずか1片であったのに対して本篇に提示した資料はきわめて良好という。

これらの土器は、E5-d4・d5・e4・e5、E6-d1・e1 小区画にかけて検出されたほゞ円形プランの56年度E5住居跡が遺棄された後、中に落ちこんだ土層の凹みにすてられた一括資料でもあり、共存関係はきわめて明瞭である。報告者の松井一明はその内容をⅠ～Ⅲ系統として分析しているが、その内容は中部山岳の猪沢式土器⁽⁷⁾・平出ⅢA系土器⁽⁸⁾、関東の五領ヶ台上層式土器⁽⁹⁾・猪沢式土器の伴う膳板式土器古段層⁽¹⁰⁾、東海西部地域の前畑式土器⁽¹¹⁾・北裏C式土器直後式⁽¹²⁾、畿内・瀬戸内の船元式土器⁽¹³⁾(但し1片)等の地方化した土器という。それらの特徴を示す資料が一括資料として共存関係をつきとめえたことは、東進地域における中期末土器型式の構成内容をするために貴重な資料といえよう。さらに、船元式土器を除く一括資料中に、周辺地域からの搬入土器の有無をたしかめるために清水芳裕氏に胎土分析をお願いしたところ、搬入土器を証明する資料は1例も含まれていないとの結論を寄せられている。

また、この一括資料が大畑遺跡において検出されたことは、大畑遺跡の開始期を中期前葉まで引きあげることになった意味からも貴重な事実であったといえよう。

その他遺構に関して付言しておきたい。55年度に存在が確認され、今年度沢田正昭氏の指導によってとりあげられ保存された昭和55年度1・2号人骨についてである。山口敏氏の同定によれば、1号人骨は壮年～熟年期の女性、その頭部に接して発見された2号人骨は幼年前期のものに比定しておられる。合葬人骨と判断されているものであるが、出土状況実測図は本篇の挿図第27にも提示している。合葬人骨が埋葬された土壌を、同図には縦長の長方形プランとして図示されているが、やゝ掘りすぎの感を否定しえず、本来土壌の範囲は今少しせまかったのではないと思われる。合葬そのものについても検討の余地を残すところである。

金子浩昌氏にお願いした脊椎動物の分析結果も、大畑遺跡の性格を理解する上で貴重な資料といえよう。伊藤通玄氏による石器用材の鑑定結果、加藤芳朗氏による地学・地形的な所見など、いずれも大畑遺跡の総合的理解にとって欠くことのできない貴重な知見である。記して謝意を表させていただく次第である。

文末ではあるが56年度発掘調査に理解を示された土地所有者諸氏、発掘調査から本篇上梓に当たって種々のご配慮をいただいた袋井市教育委員・鈴木勲一氏以下同事務局員諸氏に対して

謝意を表させていただき、総括に代えたい。

(市原寿文)

引用文献

(1) 袋井市教育委員会 1981 「袋井市大畑遺跡」—1951・1977・1978・1980年度の調査—

(2) (1)と同じ

(3) (1)と同じ

(4) (1)と同じ

(5) (1)と同じ

(6) (1)と同じ

(7) 藤森栄一 他 1965 「井戸尻」 中央公論美術出版

(8) 大場磐雄 他 1955 「平出」 平出遺跡調査会，朝日新聞社

(9) 岡本 勇 他 1970 「五領ヶ台貝塚」 平塚市文化財調査報告 9

(10) 増子康真 他 1977 「東海先史文化の諸段階（資料編1）」

(11) (10)と同じ

(12) (10)と同じ

(13) 間壁忠彦 他 1971 「里木貝塚」 倉敷考古館研究集報第7号 倉敷考古館

(14) (1)と同じ

(15) (1)と同じ

付載 大畑遺跡出土人骨の取上げについて

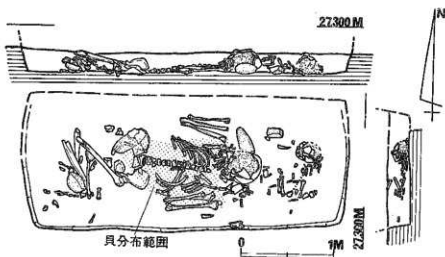
昭和55年11月、大畑遺跡範囲内調査中に第3トレンチより屈葬人骨（成人1体、幼児1体）が発見された。この人骨は包含層最上部から出土したにもかかわらず、保存状態が良好で、また成人骨と幼児骨が同時に埋葬された可能性があり資料的にも重要になってきた。そこで、市教委は関係各機関と協議の結果、人骨については56年度に保存処置を講ずることとし、方法については奈良国立文化財研究所の沢田正昭氏の指導をうけた。また人骨の人類学的な調査についても東京国立博物館の山口 敏氏に現地にて出張観察していただいた。

人骨の取上げ作業がおこなわれた昭和56年11月はほとんどの作業が雨天のもとで実施された。そのため作業は遅れぎみであったが、11月7日～11月8日までの2日間に取り上げた。

工程としては次のとおりである。

- ① 人骨の埋蔵してある土壌の周囲を取上げ用のステンレス枠の大きさにあわせてカットする。
- ② 土柱状に残った土壌に上部よりステンレス枠をはめ込み固定する。
- ③ ステンレス枠の底面部分を切り離すため直径 25cm のドリルで穴をあけ、ステンレス板をあてて電気溶接する。これを順次くりかえし取上げ枠の底へすべてステンレス板を溶接する。
- ④ ステンレス板下部に60mmの角パイプを電気溶接し、ステンレス板の補強及びクリーン吊り上げ用とする。
- ⑤ 2台クリーン車にて吊り上げ陳列ケースに納める。
- ⑥ 陳列ケースごとトラックにて仮置場（教育委員会 分室）搬入する。
- ⑦ 陳列ケース設置後、人骨をクリーニングしアクリルカバーをかけて完了する。

以上が人骨の取上げ方法であるが、人骨本体への処理はなにも実施していない。これは、大畑人骨の保存状態が良好なためである。加えて基盤となっている土質が固くずれにくい等の条件が整っていることもある。また、樹脂加工をするにしても現在よりさらに改良され薬品、方法が熟慮してからでも遅くないとの沢田正昭氏の指導によってである。



挿図第24 取上げ保存人骨実測図

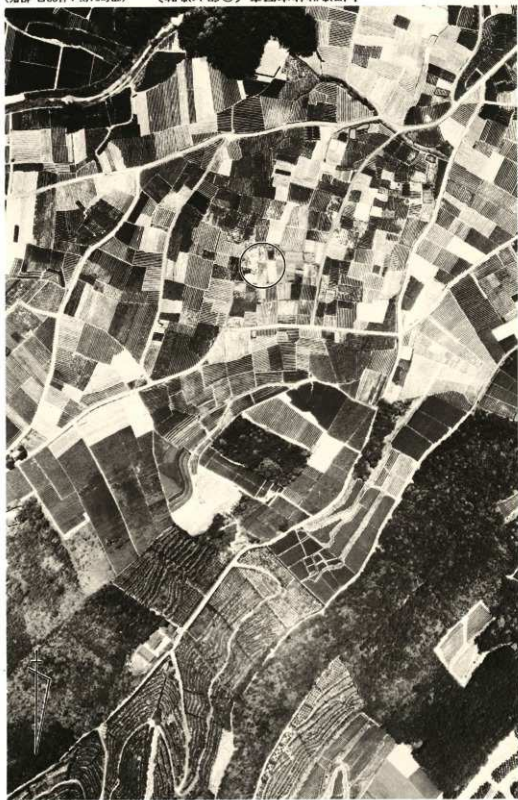
第5章 第3節 参考文献

- (1) 大場 肇雄 他 1955年『平州』平出遺跡調査会 朝日新聞社
- (2) 藤森 栄一 他 1965年『井戸尻』中央公論美術出版
- (3) 武藤 雄六 他 1978年『曾利』富士見町教育委員会
- (4) 作 信夫 他 1976年『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—茅野市原村その1、富七見町その2—』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会
- (5) 林 茂樹 他 1969年『月見松遺跡緊急発掘調査報告書』伊那市教育委員会
- (6) 丸山敏一郎 他 1972年『長野県中央道埋蔵文化財包蔵地発掘調査報告書—飯島町その2—』日本道路公団名古屋建設局 長野県教育委員会
- (7) a. 西村 正衛
b. 西村 正衛 1972年『阿玉台式土器編年の研究の概要』『早稲田大学文学部研究紀要第18輯』
1970年『千葉県小見川町阿玉台貝塚』『早稲田大学教育学部学術研究第19号』
- (8) 間壁 忠彦 他 1971年『早木貝塚』倉敷考古学研究会第7号 倉敷考古館
- (9) 平林 将信 他 1978年『一般国道246号長野バイパス埋蔵文化財発掘調査報告(Ⅱ)—西郷寺遺跡(A地区)、長久保城址(二の丸)—』静岡県教育委員会 長泉町教育委員会 建設省中部地方建設局
- (10) 加藤 賢二 1980年『遠江地方における縄文中期中位の非磨板の土器』『静岡県考古学シンポジウム4』静岡県考古学会
- (11) 愛知県教育委員会 1968年『矢作ダム水没地域埋蔵文化財調査報告』
- (12) 磯部 幸雄 他 1976年『清水ノ上貝塚』南知多町教育委員会
- (13) 大江 令 1965年『飛騨の考古学Ⅰ』昭和考古文庫
- (14) 増子 康真 他 1973年『牧野、小山遺跡』岐阜県教育委員会 美濃加茂市教育委員会
- (15) 大参 義一 他 1972年『岐阜県史』通史編原始 岐阜県
- (16) 嶋 正央 1959年『奥熊野の縄文式文化』尾鷲市教育委員会 熊野市教育委員会
- (17) 中村 貞史 他 1979年『和歌山の研究Ⅰ』地質、考古編 清水堂
- (18) 増子 康真 他 1977年『東海先史文化の諸段階(資料編1)』
- (19) 増子 康真 他 1980年『岐阜県八百津町市森遺跡発掘調査報告』八百津町教育委員会
- (20) a. 石川考古学会 1979年『上山田貝塚』
b. 富山県教育委員会 1977年『砺波市箆間遺跡緊急発掘調査概要』
- (21) 山内 清男 1979年『日本先史土器の縄紋』先史考古学会
(他の縄文同定も山内氏によった)

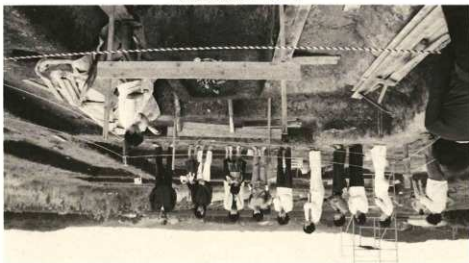
資井面大補遺集 (正・誤・表)

正	誤	正	誤
大補遺集	3	大補遺集航空補遺集	大補遺集航空補遺集
1	1.2	作・集・再・集	作・集・再・集
2	4	小田川/山産を	小田川の産れを
3	スケール	1000	2000
4	5	昭和6年2月	昭和7年2月
5	10	増・定	増・定
6	17	I・II 系面に分岐	I・II 系面に分岐
7	22	北・上・南・文を	北・上・南・文を
8	15	半・教・習・文を	半・教・習・文を
9	21	厚い・土・面	厚い・土・面
10	11	ゆるやかにひろく	ゆるやかにひろく
11	25	導入されたものと	導入されたものと
12	8	砂・玉・砂・面	砂・玉・砂・面
13	10	小・空・面	小・空・面
14	2	河原より小空に砂	河原区より小空に砂
15		を留む	を留む

大畑遺跡航空写真（○印が遺跡）（昭和54年4月22日撮影）



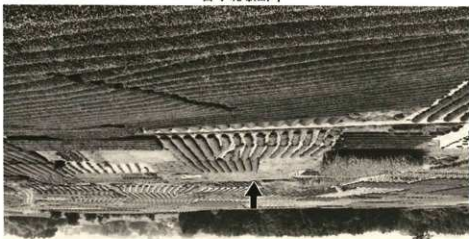
市民による遺跡見学



調査区より小笠丘陵を望む



大畑遺跡全景





E 6 区燐散布状況



F 5 区燐散布状況



F 5 - NW 大埋葬状態



F 5 - NW 貝ノロツク出土状況



E 5 内土壌



F 4 内集石土壌

平出 3 A 系土器出土状態



E 5 住居跡出土遺物近景



E 5 住居跡および遺物出土状態





E 5・E 6 完掘状況



F 5 完掘状況



F 5 南トレンチ完掘状況

F 6—NW内頭蓋出土状況



F 6 土壇完掘状況



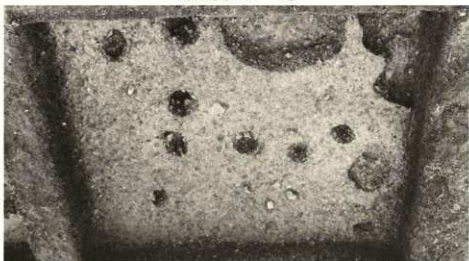
E 4 住居跡完掘状況



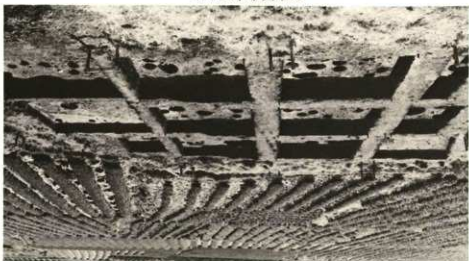
E 5 住居跡調査風景



G4-SE 完掘状況



調査区南完掘状況





土壌の周囲をスチレンス枠の大きさに削る



上部よりスチレンス枠をはめ込む



下部をドリルで掘削する



順次底にスチレンスの板を入れる



底を電気溶接する



ワイヤーロープを底へかける



スチレンでつり上げる

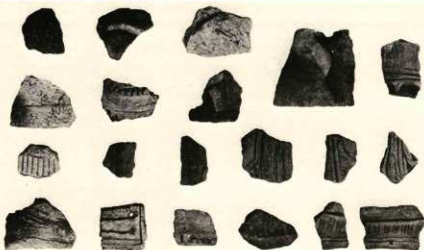


ケースに収めトラックで保管場所へ運ぶ

E 5 住居跡出土遺物(1)



E 5 住居跡出土遺物(4)



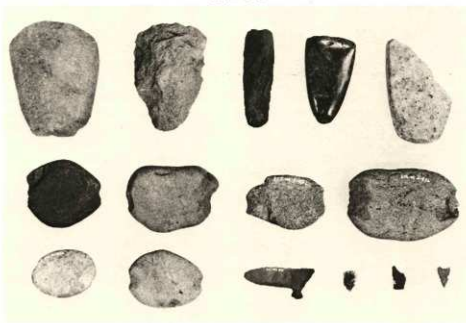
E 5 住居跡出土遺物(3)



E 5 住居跡出土遺物(2)



出土石器



土製品、その他の遺物



袋井市大畑遺跡

—1981年度の発掘調査概報—

1982年3月31日

編集・発行 静岡県袋井市教育委員会 ㊟

袋井市高尾754の1

印刷 (株) 開明堂

浜松市中沢町1-1